

5 中央に東小学校の校名

校 歌（昭和五年六月七日制定） 作詞網瀨正幸 作曲渡部日出雄

一、丘よりのぞむ 空知川

二、稔り豊かな この郷土は

遠くにけむる ピンネシリ

屯田兵の 汗の跡

風にやさしい 歌がある

風にきびしい 歌がある

友と楽しく 肩寄せあつて

友と励まし 腕組み合つて

たしかな知識 学ぼうよ

たくましく体 鍛えよう

東、東、みんなの学校

東、東、みんなの学校

三、つつじ花咲く 学び舎に

君とわたしの 描く夢

風にあかるい 歌がある

友と仲よく 手をとりあつて

ひろい世界へ はばたこう

東、東、みんなの学校

歴代校長

初代 本間 茂 昭和五三・四・一（現在）

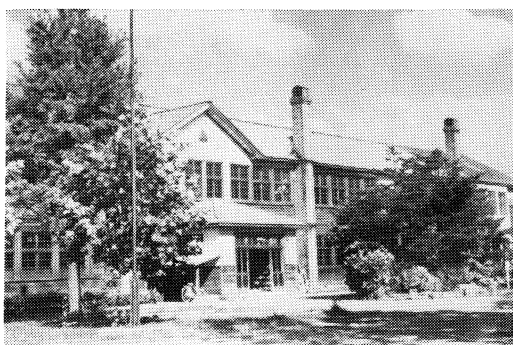
・卒業生第一回九三名（昭五四・三・二〇）

第三節 中 学 校

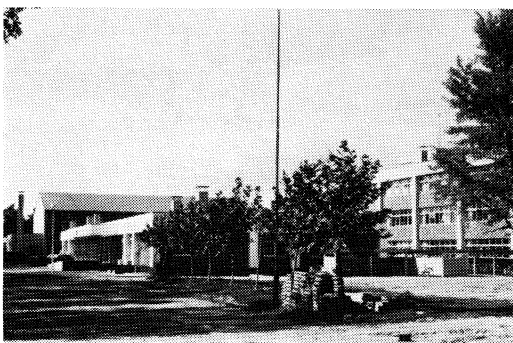
江陵中学校（黄金町西一丁目七番）

昭和二十二年五月一日、新教育制度の実施に伴い、滝川町立第一中学校として、第一小学校の一部を仮校舎とし開校。その時、学級数八、生徒数五一二名、教員数一八名で、殊に校長には新制中学校の重要性に鑑み、旧制中学校長である滝川中学校長斉藤正が任命された。

昭和二十四年六月十七日、第一期分校舎六教室が竣工し、移転す



江陵中学校



近代化した新校舎

ることになったが、校舎不足のため、滝川女子高等学校（現在の滝川高校）の一部及び第一小学校、そして新校舎と三カ所に分散して教育が行われるなど苦しい過程を経て、昭和二十五年三月、第二期分校舎が竣工し、同年四月全生徒を収容した。

この後、生徒の激増や特別教室建築のための増築が毎年のように行われ、昭和三十九年の第十五期工事によって完了、現在の校舎ができあがった。

この間、当初第二小学校に併置され発足した分校は、昭和二十三年四月に独立し第二中学校として開校したが、昭和二十六年四月一日、第二中学校を合併し、校名も第一・第二とよぶ序列式なものを改めて滝川町立江陵中学校として新発足をした。

その後も生徒は激増の一途をたどり、三十五年四月現在で学級数

三一、職員四七名となり、翌三十六年には生徒を収容できず、第一小学校に五教室を間借りする状態で、昭和三十七年には生徒数も二、〇〇〇名近くとなったため、開西中学校を開校、一〇学級をわけて分離独立する。

こえて、昭和四十四年四月には、通学区の変更があり、国道三十八号線道路の境界線を市役所前官庁道路として、この間を明苑中学校通学区とする。

その後、校舎の老朽化に伴い改築の運びに至り、昭和五十三年十二月、第一期工事完了により、生徒の一部が移転、同五十四年七月第二期工事完了により、普通教室、特別教室、職員室、校長室が竣工、生徒も職員も新校舎に移転、残る体育館、給食室、玄関なども昭和五十四年十二月には第三期工事として完了予定で、木造校舎から近代の粹を集めた鉄筋コンクリートの新校舎に生まれ変わりつつある。

・江陵中学校改築事業の概要

着工昭和五十三年六月十四日 竣工昭和五十四年度

規模 校舎鉄筋コンクリート三階建 屋体鉄筋コンクリート二階建

校舎 四、六四三・二〇平方メートル 屋体 一、三一九平方メートル

事業費総額 七九四、六一〇、〇〇〇円

校舎 六三八、六六二、六二七円、屋体 一五〇、四五二、四六五円

外構一式 五、四九四、九〇八円

請負業者

校舎屋体建築 (株) 泰進建設 (株) 斉藤組 共同企業体

給排水設備 田中管工(株) 電気設備 末広屋電気(株)

なお、昭和五十五年四月までには、明苑中学校校舎も新築完了の

運びとなっており、先に新築された東小学校校下の生徒は、明苑中学校へ転校することになっている。

江陵中学校発足以来、管内教育はもとより道内的にみても重要な活動を続け、昭和二十八年の全道社会科研究大会をはじめ、その後全道PTA研究大会など、全道的研究大会の場となることしばしばであった。

また、生徒の文化・体育面の活動も盛んで昭和三十年の全道合唱コンクール三位入賞をはじめ、三十七年には美術面で総理大臣賞、四十二年全道吹奏楽コンクールに優勝して、全国大会に駒を進め、その後全道中学校野球大会優勝など、全国大会出場吹奏楽七回、バレー四回、卓球四回、バトミントン四回、バスケット一回の多きを数え、なかななく五十三年のバレー部は全国大会三位入賞銅メダルを勝ちとっているのは異彩を放っている。

また、昭和五十一年には空知管内教育実践表彰校としての栄に浴し、本校の教育活動は広く道内外に、高く評価され、現在もその歩みが続いているのである。

校章 (昭和二十六年四月一日制定)

校章全体の形は、雪の結晶六角形をあらわし、北国のけがれを知らない純粹さと、困難に耐えぬく力強さを意味します。また小さく

突き出た三つのものは「ペン」を型どったもので、学問を本分とする生徒に真理の追求を要求し、「中」は義務教育最終学校としての誇りと自覚を意味し、それを包む桜模様は日本人とし



江陵中学校校章

ての願いである自主、独立、平和の精神を意味し、さらに、それを包む円は、人間生活に大切な寛容と協力を示し、結晶は滝川の頭文字T六つをもじっている。

校歌 清水重道作詞 信時 潔作曲
美しく磨きつくらん

明日の世を担うわれらの
ま玉なす 心の鏡

曇りなく 正しく映し

ああ誠実の道を照らさん

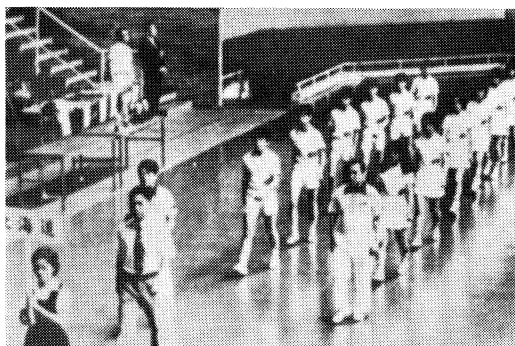
惜しみなく究め明かさん

明日の世を築くわれらの

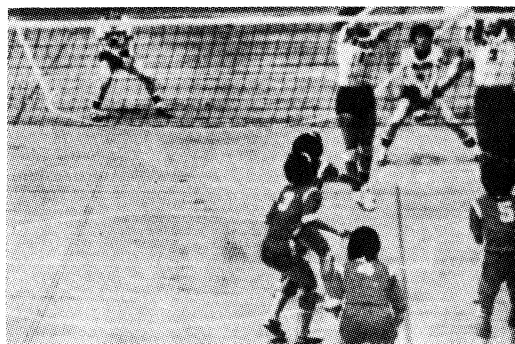
きおいたつ窮理の望

新しく清しく昂り

ああ学問の奥が探らん



(49. 8) 全国中学生バドミントン大会



(51. 8) 全日本中学生バレーボール選手権大会



(51. 11) 全日本吹奏楽コンクール

明苑中学校(滝川市花月町二一五)
昭和二十二年五月一日、新学制
実施に伴い滝川町立第二中学校と
して発足し、本校を第三小学校、
分校を第四小学校の校舎一部を仮
校舎として開校した。
翌二十三年一月一日、分校は第
四中学校として独立、本校は滝川
町立第三中学校と校名変更、これ
で町内中学校は小学校と同様、第
一、第二、第三、第四と四つの中

逞しく汲まん掬ぼん

明日の世を守るわれらの

ほとぼしる生命の泉

健やけく優しく溢れ

ああ健康の歌ぞ歌わん

歴代校長

初代 齊藤 正 昭和三・五・一

二代 国兼 昇 昭和三・七・一

三代 高橋 均 〃 七・五・一

四代 鎌田 博 〃 三・五・一

五代 竹村 直三 〃 六・六・一

六代 室塚 義信 〃 三・四・一

七代 沼田 清吉 〃 四・四・一

八代 網淵 正幸 〃 四・四・一

九代 谷岡 齊 〃 五・六・一

〇代 若山 良一 〃 五・四・一
(現在)

現在の状況

校地 一一、二五〇坪

学級数 二五 生徒数 一、〇七三

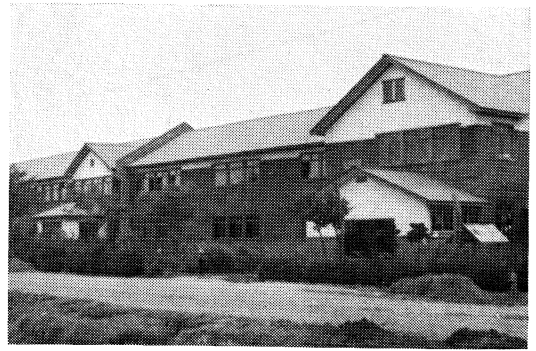
職員数 四二 卒業生 一一、二六一(昭和五三年度)

学校が、それぞれの小学校に併置されたのである。

町内新制中学校設置に当たり、新学制実施協議会は検討の上二校案を採択したが、本校校地問題で壁につきあたり他に適当な地を得られず、ついに現位置への決定をみた。

昭和二十四年四月十日、新校舍第一期工事が九分どおり完成の際、不慮の災厄にて全焼、同年八月十一日、六教室、便所、その他二二二・五坪を再建、二部授業による苦しい教育を続けた。

昭和二十五年五月十三日、第二期工事五教室その他二二二・五坪を新築、さらに二十六年四月三日、第三期増築屋体、生徒玄関その他二二〇坪を竣工、同二十九年三月十七日、第四期工事二教室、同三十二年六月三十日、第五期工事二教室、玄関、給食室七六坪、同年十二月十五日、第六期工事二教室五五坪、昭和三十三年十二月二



明苑中学校



全空知中学校野球大会優勝（昭和24. 9）



全空知の金賞、全道の銀賞（昭和49. 9. 14）



明苑中学校新校舍

十四日、第七期校舎増築屋体五〇坪を完成し、三十六年八月十八日、第八期校舎増築、普通教室一、音楽室、玄関その他一〇一坪、四十年十一月十日、第九期技術科室、同準備室、理科実験室、同準備室が鉄筋ブロック造り一八〇平方メートル竣工、昭和四十一年十月二十九日、第十期校舎増築、普通教室二、家庭科室、調理室、美術室など九五四・九平方メートルが竣工したのである。

開校当時「第二中学校」一〇学級編成で生徒四三三名、職員一四名で出発した本校も、昭和二十三年一月一日「第三中学校」、二十六年四月一日「明苑中学校」、三十三年七月一日「滝川市立明苑中学校」と校名変更、中学校新設のころには、町内一校説が土地買収問題や通学区のことなどから二校説になり、同規模程度の学級でと踏み出したが、現江陵と異って校地の狭隘を残しながら数次にわた

る増改築工事を経て、今日の明苑中学校となった。

空知の有名校としての「明苑」は、その学校経営も異彩を放ち、学習面はもちろん、文化・体育方面の活動も盛んで、空知・全道に輝かしい足跡を残し、いまた、さらに奮起し、より良き伝統の継承に努めている。

近年、特に校舎の老朽化も目立つようになり、校地の現状から、新町に近代的校舎の建設が進められ昭和五十五年度から、東栄中学校を統合、東小学校校下区域も包含した新出発を迎えようとしている。

・統合明苑中学校建築事業の概要

着工昭和五十三年七月十四日 竣工昭和五十四年度

規模 校舎鉄筋コンクリート三階建、屋体鉄筋コンクリート二階建

校舎 五、六一〇・〇〇㎡ 屋体 一、二九一・〇〇㎡

学校用地 一四、八〇〇・二三㎡

事業費総額 一、〇一五、二八三、九七二円

用地取得費 二三五、七八三、九七二円

校舎 六〇九、六五九、七五六円

屋内体育館 一六〇、〇一九、五〇五円

外構一式 九、八二〇、七三九円

請負業者 (株) 中山組、(株) 神部組共同企業体

給排水設備 (株) サークル鉄工所 電気設備 (有) 大川電気商会

校章 (昭和二十三年四月一日制定) 考案者 畑中順太郎



「北」は、片仮名で滝川の「タ」を表し、同時に北海道の「北」をも意味している。柏の葉と北は「三」の数を表すと共に多数を示し、「中」を囲むは明苑の明である。

校歌 作詞細田義行 作曲小泉正松(昭和二六・一〇制定)

一、よるこびは明かるき苑に

湧き立ちて花咲くものを

この庭に春秋三年

学びゆく 幸いふかし

誇りある明苑

あこがれの眸に仰ぐ

なつかしの明苑

三、うららけき平和の春よ

ささほこる文化の花よ

大いなる理想を胸に

さわめゆく真理のすがた

誉ある明苑

若人の気魄も新た

栄えゆく明苑

歴代校長

初代 関 吉四郎 昭和三・四・五

三代 森谷 武 〃〃三・四・六

五代 高橋 進 〃〃四・三・三

七代 佐藤 房夫 〃〃四・三・三

九代 渡辺鉄三郎 〃〃四・三・三

〃〃 〃〃 〃〃 〃〃

〃〃 〃〃 〃〃 〃〃

〃〃 〃〃 〃〃 〃〃

東栄中学校 現況 学級数 一二 生徒数 三五〇 職員数 二三 卒業生 五、三九六(昭和五四・三現在)

東栄中学校

新学制の実施に伴い昭和二十二年五月一日、町立滝川第二中学校(現明苑中学校)の分校として発足したが、翌二十三年一月一日、町立滝川第四中学校とし独立し、第四小学校の校舎の一部に併置され



東栄中学校

た。

昭和二十六年四月一日、町立東栄中学校と改称昭和四十五年四月一日、小中併置校が分離それぞれ独立校になるまでは、小学校長が兼務していた。

昭和二十五年、校舎を小学校に続けて建築したが、国道三十八号線舗装工事施工に際し、一部路線を変更して校庭内を通ることとなり、校舎の移転問題が起こり、昭和三十七年十二月、新築された現校舎へ移り、五十二年九月、開校三十周年を迎えた。

東栄中学校は幾多の変遷を経ながら、年毎に学校の伝統を築き、対外的にも活躍、特に籠球部は、中空知で三位、準優勝、優勝とその成績を昂め、四十四年空知大会を経て、全道第一回少年、少女バスケットボールで優勝、全道の強豪を倒して全道制覇の偉業をなしとげたのは特筆すべきことであった。

近年、過疎化の波によって生徒数も減少、昭和五十五年度より明

苑中学校に合併統合となり、東栄中学校は閉校されることになっている。

校歌 細田義行作詞 奈良熊十郎作曲（昭和二六年四月制定）

滝川の東を占めて 清らなる空知の流れ
野に里にあふるる恵 友としていそむ月日
あけくれを心正しく ひたすらに真理もとめて
美しく明るく伸びて かがやかに文化の花の
新しき世を築くもの 咲きかおる世を築くもの
東栄の若きわれらぞ 東栄の若きわれらぞ

※校歌・校章は小・中学校同じである。

歴代校長（初代より七代までは小学校長兼務）

八代 窪田 秀 昭和四・四・一 九代 渡辺 昇 昭和四・四・一

二代 堀江 三郎 〃〃 五・四・一 〃〃 五（現在）

・卒業生総数一、二四六名（昭五四・三）

開西中学校

江陵中学校は、開校以来生徒が急増し、昭和三十五年ごろになると三〇学級を超えるマンモス校となり、その緩和策として、市内西部地区に新設中学校を設置することとなり、昭和三十五年度末、市議会において議決された。

昭和三十六年七月着工し、同年



開西中学校

十一月鉄筋コンクリート二階建ての校舎が完成した。

昭和三十七年四月一日にて認可され、独立校とし学級数一一、生徒数四九九名、初代校長として溝口隆重が任命され、同年九月三十日体育館が落成、十一月二十日開校並びに落成記念式典を行う。

工事の概要は、昭和三十六年十一月、普通教室一一をはじめ工作室、給食室、音楽室など、一、九七九平方メートル。三十七年九月三十日、ステージ、地下室、用具室付設の体育館六一八平方メートルが完成、三十八年十二月二十五日、理科室、技術室など五六一平方メートル、三十九年九月普通教室二など二九八平方メートル、昭和四十一年十一月十四日、職員室、校長室など一六〇平方メートルが完成している。

滝川の発展は西方の開発と共に、人間開発の意味も含めて「開西」が、地区の中心となってスタートしてから、昭和五十一年九月には開校十五周年記念式典を挙行、この間、地域・学校の一体化と生徒の諸活動も盛んであるが、特に四十一年の学研教育賞をはじめ、最近では「花いっぱいコンクール優秀」と明るい展開がなされている。

校 章 (昭和三十七年五月一日制定) 考案者 高田幸三



- (1) 全体が末広の形で向上していく。
- (2) やぶみの形は、素直にまっすぐ伸びる生命を表現する。
- (3) 両翼は、それぞれ真・善・美・端正な結合を示す。

校 歌 作詞入江好之 作曲穴戸睦郎 (昭和三七・一一・二〇制定)

一、山なみはるか ビンネシリ 二、豊かな地 きり開く

れい明の 光の中に 新しい いぶぎの中に

希望のせゆく 石狩川 まこと求めて やまぬ心

ほこり高く 歴史をかさね 力みちて 若木はのびる

われらは未来を つくりだす たゆまぬ歩みを ちかい合う

三、夕映えにおう 野の果てに

わきおこる 喜びのうた

あすをたたえ 心結び

北の空に こだまをかえす

われらは使命に 生きてゆく

歴代校長

初代 溝口 隆重 昭和三七・四一

二代 志田 豊夫 昭和四一・四一

三代 富 慶克 昭四一・四一

四代 並河 正夫 昭四一・三三

五代 小野 武男 昭四一・三三

六代 山本 定雄 昭四一・三三

七代 吉田 善男 昭四一・三三

昭四一・三三 (現在)

・卒業生総数二、六四二(昭五四・三)

・開西中学校開校のころ、江陵中学校の生徒急増と増築で、このまま推移すると昭和三十六年度には収容しきれないということから、もう一校中学校新設が焦眉の問題となってきた。

そこでとりあえず三十六年度に分校ということで一校新築されることになり、教育委員会で検討され、将来の見通しの上に立って西にするか東にするか考えられたが、結局西ということで現在地に決まり、昭和三十六年着工、その年の十一月末鉄筋コンクリート二階建ての現在校舎が落成したのである。

この間、四月の時点で一年生全部を江陵に収容できず、一小卒業生を三学級だけ改築中の古校舎を借りて学習させる非常手段をとっていたが、開西中校舎も十一月完成したので、間借りしていた生徒だけ、三学期になって開西に通わせようということが計画された。

このころたまたま開西中学校通学区区域の設定について委員会としては西小学校校下だけと考えていたが、同地域から新設の学校であり西小新設の当時も、PTAとして相当苦勞したことから、ぜひ本町地区を通学区域にしてほしいという要望も表むきなされていたため一小に間借りしていた本町地区の父母は、今仮にということで開西に通わせて、それが将来にまで続くのではという不安から、開西に一冬だけでも通うことを承諾しなかった。

数次の会見、接衝、懇談がなされたが、結局新しい校舎はそのまま、ひと冬使用しないで四月から開校ということになった。

△そうらっぶち▽

江部乙中学校（滝川市江部乙町西十三丁目二）

北辰中学校の沿革 昭和二十二年五月一日、北辰中学校創立、独立校舎がないので、北辰小学校二階建て校舎を仮教室に充当し、初代校長竹原徳太郎並びに職員は開校準備に専念、五月二十六日入学式を挙行し授業を開始した。

その当時の学級数は、一学年四学級、二学年三学級、三学年一学級、東陽分校に一学年一学級、二・三学年一学級の計一〇学級の編成であった。

創立時、江部乙村の独立中学校は本校一校であって、通学距離の



北辰中学校

関係上東陽小学校に北辰中学校東陽分校を併置した。したがって通学区は小学校と同様江部乙川を境として、以南は本校へ以北は東陽分校と定められた。二十四年四月一日に東陽中学校が独立し、東陽小学校に併置され、統合になるまで続いた。

独立校舎の必要は各方面から強く要望されており、理事者及び議会においても新築の要を痛感していたが、終戦の後で各種資材は全般的に欠乏し入手困難であり、殊に建築資材に至っては総て統制下におかれていた関係上新築は絶望視されていたのである。

たまたま、計根別の旧陸軍兵舎の払い下げを知り、二十二年十月二十四日この獲得に成功したが、解体輸送や遠隔の地ということ予想以上の困難があった。

非常な悪条件を克服し、校舎新工事は二十三年十一月一日に着工翌二十四年八月二十五日竣工落成し、同月二十八日新校舎に移転して授業を開始した。

なお、この建物は延べ坪数五八四坪、工事に要した経費総額は七二万六、六四三円で、財源は主として起債と補助金に仰いだのである。

その後、二十五年には、屋内体操場一三〇坪の建築が決定、同年十月十八日着工したが、上棟式挙行予定の二日前、十二月九日夜半襲来した風速二〇メートルの突風に煽られ全倒潰という災厄に遭い、約三十三万七千円の損害を蒙ったのであるが、直ちに復旧の善後策をたて、請負業者を激励して再建工事に着手、二十六年二月四日、屋内体操場の竣工をみたのである。

昭和二十七年には音楽室、同準備室、ステージ、女子専用便所など六六・三七五坪の増設がなされ、五月四日竣工、その工費は一三〇万五、〇〇〇円で財源として補助金起債及び一般歳入を充当した。

歴代校長

初代 竹原徳太郎	昭和三・五― 〃三・五―	二代 羽二生武夫	昭和六・五― 〃六・九―
三代 川端 勇	〃三・四― 〃三・四―	四代 野原次郎輔	〃三・五― 〃三・五―
五代 関 吉四郎	〃元・四― 〃元・四―	六代 北向 与八	〃元・四― 〃元・三―
七代 渡 政一	〃四・四― 〃四・三―		

なお、昭和二十八年一月、図書室落成、二十九年理科室内部改造改装、三十一年四月新放送施設完備、野球用バックネットの完備等で内容の充実が図られ、全校舎の面目は一新され学業・体育・学芸一般の活動も一層盛んになった。

特に三十五年以降、器楽コンクールにおける活躍は、NHK主催中学校の部で全空知・全道優勝、さらに全国大会二位などは、特筆されるものといえよう。

東陽中学校 新学制の実施とともに昭和二十二年五月一日、北

辰中学校東陽分校として発足、二十四年四月、東陽中学校として独立、東陽小学校に併置された。

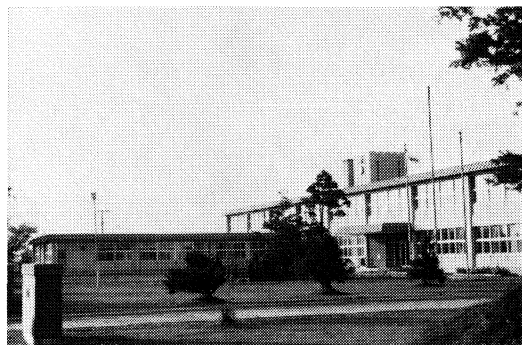
小中学校児童・生徒の漸増に従い、校舎の狭隘が感じられるようになったので、昭和二十五年度に中学校専用教室を新築した。

総建坪一〇七坪二五で普通教室三、昇降口、廊下などで、同年八月五日着工、九月二十五日竣工落成、総額百五十八万三千余円を要した。

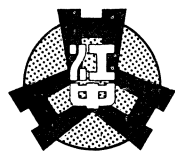
歴代校長 初代北辰中学校長竹原徳太郎兼務、二代増田久一より昭和四十四年三月三十一日までは、東陽小学校長が兼務した。

江部乙中学校の設立 昭和四十四年四月一日、町内中学校を統合し、校名を江部乙町立江部乙中学校と定め、初代校長には北辰中学校第七代校長の渡政一が発令され、名目統合し、新校舎移転可能な時期まで、江部乙中学校北辰分教室一二学級、東陽分教室三学級として、従前の校舎で授業開始となる。

昭和四十五年十一月一日、体育館を除く新校舎の完成により、北辰分教室、東陽分教室の双方が新



江部乙中学校



江部乙中学校章

第四節 高等学校

1 滝川工業高等学校と沿革

庁立滝川中学校 大正九年三月五日、北海道庁立滝川中学校として設立認可され、同年四月二十七日、滝川第一小学校にて第一回入学式を挙行、その二教室を借り、九二名の授業が開始された。

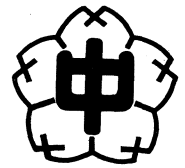
翌十年三月十二日、校舎落成して移転（一の坂町二四番地）、大正十四年三月、第一回卒業式が行われた。

創立当初の状況をさらに述べると、当時本道で庁立中学校があったのは、札幌（二校）、小樽、函館、旭川、釧路、室蘭の各一校で全部で七校、道内では八番目、郡部では最初にできた中学校といえる。

第一回入学生も志願者二九六名の中から選ばれ、正式に入学許可された者は九二名となっている。

校舎敷地一万四一〇坪（二万九一五円）、校舎七七一・五坪（本校舎二七七坪、延べ坪五四一坪。木造二階、亜鉛引き鉄板葺き。屋内運動場一七一坪、木造平家、亜鉛引鉄板葺き。五万八、一七〇円一六銭。）の土地買収及び校舎の建築は、当時の滝川町ほか近接町村の寄付によってなされたものであるが、この寄付問題は円滑に行ったとはいいいく難く解決したものは大分、後のことである。

大正十一年には三学級募集となり、学級編成は「中組」「東組」



滝中校章

「西組」とし能力別編成の形態がとられたこともあった。

いずれにしろ寄付金問題が暗礁に乗り上げ、廃校などの噂が出たこともあってか、生徒の

他校転校者や諸種の事情で中退する者もあり、各学年とも生徒減少の傾向があり、第一回卒業証書授与者は四九名、第二回生は五年になった時、一学級に減となり、卒業は四八名ということもあった。

幾多の苦難を克服して、昭和五年には創立十周年、十五年には二十五周年記念式典を挙行、昭和十七年四月二十一日、町立滝川夜間中学校併設、二十年二月二十四日町立夜間中学校を滝川町立中学校と改称した。



滝川高校校章

道立滝川高等学校 昭和二十三年四月一日、

学制改革により北海道立滝川高等学校と改称、

併設中学校を夜間課程として吸収した。

道立滝川西高等学校 昭和二十五年四月一

日、学区制設定により北海道滝川西高等学校と改称、夜間課程を定時制課程と改称、男女共学を実施する。

男女共学の問題は、当時在学していた生徒や父兄に与えた衝撃は現在の生徒には理解できないだろう。男子高校の生徒の一部と女子高校の生徒の一部をそれぞれ交換して、西高校と東高校の二つにしようというのである。それを何らかの方法で生徒の一部分を他方に移して、生徒数もだいたいバランスのとれたものにしようというのだから話は面倒、両校の教師とPTAの代表からなる委員会は、何



湖の白鳥のダンス

度も何度も会議をして案をねり、滝川は通学区域によって生徒の所属すべき高校を決めた。

今まで男子ばかりの学校に女子がドッと入ってきたのである。女子高校から移ってきた二、三年の生徒の他に一年生にも多数の女子が入学してきたので、たちまち困ったのは教師の不足と設備の不足である。家庭科の先生が足りない、ミシンもなければ調理の器具

もない、音楽をやるうにも古ぼけたオルガンしかない。それに加えて、教科の面で今までになかった選択科目がたくさんあって、生徒の希望にそったカリキュラム編制をといった状態で、まさにテンヤワンヤというありさまもあった。

男女共学が少し落ち着きかけたころ、工業課程二学級併置の問題が起こって、市内東西両高校のどちらに置くか、原案を変えて工業・商業一学級ずつにして両校に分けてほしいという地元の要望も道当局に容れられず、種々の経緯の末、西高校に決まり電気・土木の二課程がおかれたのが、昭和二十六年四月一日であった。

何といっても大きな問題は施設の充実で、工業課程の設備、一方では女子教育に必要な設備の拡充をせねばならない悩みが起こっている時、工業課程の独立を要望する声が全国的にも湧き上り、十

分な工業教育を進めるため、なるべく速やかに工業だけの学校にしなければと主張する高校長もふえ、だんだんその方向に進んでいった。

昭和二十七年四月一日、北海道立滝川東高等学校滝川の川分校（季節定時）を本校へ移管、十一月一日滝川の川分校を北海道滝の川高等学校と改称した。

二十九年四月五日、当時の普通科二、三年の生徒と一三名の職員は離散式の後、滝川東高等学校へ分かれていった。

北海道滝川工業高等学校

昭和二十九年四月一日、滝川学区の高校再編成に伴い、工業課程だけの学校となり、その後、三十年四月

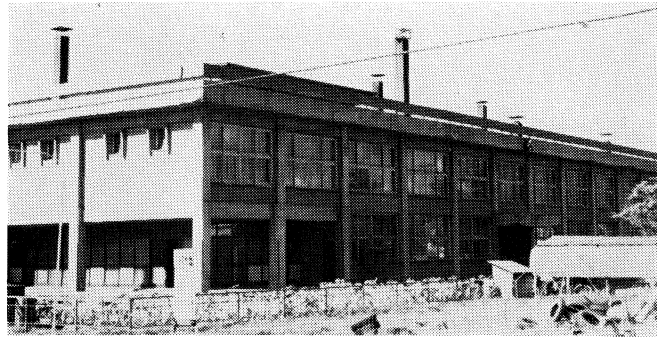
一日、滝の川高等学校募集停止、滝川工業高等学校校定時制（季節）課程を設置、三十四年三月一日、滝の川高等学校閉校、三十四年四月



摩擦ブラシ中滝

月工業化学科、三十五年四月機械科新設、同年七月二十三日校舎移転決定、昭和三十六年六月三日、新校舎起工式、翌三十七年一月二十七日、二の坂町六二番地の新校舎へ移転、同年四月一日定時制（夜間）課程普通科募集停止、同課程電気科を新設、九月二十二日校舎落成式を挙げる。昭和三十一年四月一日、機械科増設、四十年四月定時制（季節）課程閉課、

2 滝川高等学校と沿革



滝川工業高等学校

町立滝川高等女学校 昭和四年四月十六日、北海道滝川女学校の設立認可され、同年五月十日滝川第一尋常高等小学校において入学式を挙行、翌十一日より第一小学校の一部を仮校舎として授業を開始、十二月二十六日新校舎に移転、昭和五年五月十日、開校式と落成式を挙行了した。

庁立滝川高等女学校 昭和六年三月十日、四月より道庁立に移

管し、改称の件認可さる。昭和十

四年四月一日補習科付設、十七年

四月一日志願者の増加に伴い第一

学年より三学級編成となる。十八年四月一日中学

校令実施されて補習科廃止、昭和十九年一月、本

校付設保育所を開設、また同年四月一日より本校

付設看護婦講習所を開設し二十一年三月三十一日

これを閉鎖、昭和二十二年三月三十一日には、保育所も閉鎖した。



滝川高女胸章

滝川高等女学校校歌 葛原幽作歌 梁田貞行曲（昭和一〇・一一・三制定）

一、峰の月野路の花うつし来て
空知石狩二つの川ぞ
力を合せ一すじに
遙げき希望に注ぎ行く

二、物みな白妙にきよめては
降りて積りて山辺に野辺に
手足を練れと笑ましくも
おのれを捨つるか真白雪

深く啓示に心の鏡明暮磨き
励むも楽し滝川高女

堅き操の誓も永久に校章の梅を
かざして嬉し滝川高女

三、弥栄の大やまと日の本の
天皇陛下を神とも仰ぎ

親もしたいたてまつる
矜も尊き國つ民

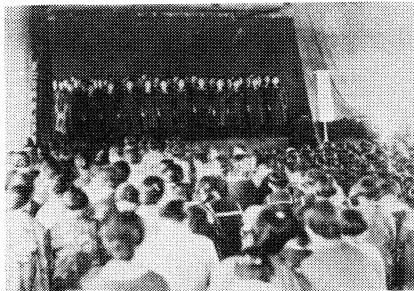
高き薫の白百合小百合胸内ひめて
集ふも床し滝川高女

道立滝川女子高等学校 昭和二十三年四月一日、新学制により、

北海道滝川女子高等学校となる。新学制施行により併設中学校を置く。同年十一月一日、夜間定時制課程設置認可される。滝の川、幌倉、新十津川に季節定時制課程の分校設置認可、昭和二十四年五月



校歌制定記念音楽会（昭和10年11月3日）



一日には赤平分校の併置認可されたが、同年十一月一日、赤平分校独立して北海道赤平高等学校となる。

道立滝川東高等学校

昭和二十五年四月一日、高等学校再編成



滝川東高校章

により北海道滝川東高等学校となり、通学区規則の制定により男女共学となる。二十六年二月、旧校歌を廃止新校歌を制定する。同年四月一日、浜益分校併置認可される。

説明
旧滝川中学校で用いられた桜の花に滝川の川を線で配した。

翌二十七年四月一日、滝の川分校を滝川西高等学校に移管、同年十一月一日、教育委員会制度の改革により、幌倉、新十津川、浜益の分校それぞれ独立高等学校(第二種)となる。

滝川東高等学校校歌

風巻景次郎作詞

長谷川良夫作曲(昭和二六・二七制定)

一、眼をあけて涯際を望め

石狩の水脈引きはるか

影うつし雲は流るる

われ等いまここに集いて

ひたと見る

永遠の懐を秘めて

うつらざる真理の姿

三、雪深き国のまほろば

白銀の野辺は耀い

若々し学び舎たてり

われ等いまここに集いて

正しくぞ共に進めば

かがやきのいやます榮え

誇あり

二、窓ひらき遠くのぞめば

空にみつ風爽やかに

山脈の起き伏し青し

われ等いまここに集いて

生命なり

健やかな歌をうたえば

花さくや梢もさやく

北海道滝川高等学校

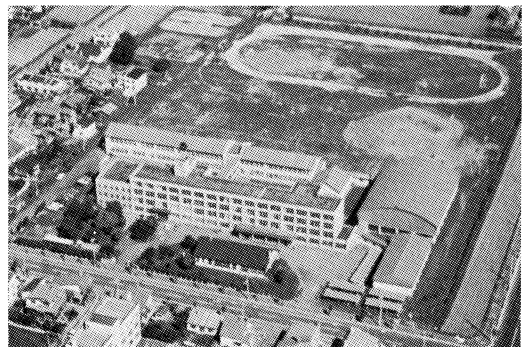
昭和二十九年四月一日滝川東・西両高校の普通科統合により北海道滝川高等学校と改称する。

昭和四十四年六月二十三日、校舎改築第一期工事着手。四十五年三月二十九日、第一期工事完成(鉄筋コンクリート四階)。四十六年三月三十日、第二期工事完成(二線校舎、前面四階建の残部)。同年九月十九日、校舎改築落成式典を行う。

この間、三十五年四月から普通課程一学年より七学級、三十九年四月にはさらに一学級増により八学級、四十四年三月二十八日に理科設置され一学年より普通科七学級、理数科一学級となつてい

る。昭和四十八年には全国高校囲碁選手権大会に男子優勝、五十年に女子個人優勝、団体準優勝、五十二年、五十三年には全国学校合奏コンクールで最優秀賞連続受賞をはじめ、体育・文化活動で滝高の名を昂め、学業にも専念、旺盛な意欲と向上を示している。

昭和五十四年九月三十日、創立五十周年記念式典・祝賀会を挙行「飛翔」の名にふさわしく、五〇年の伝統に新しい一頁を加える熱望に燃え、前進を誓いあったのである。



校舎全景

を閉じた。

歴代校長（滝川女子高校・滝川東高校・滝川高校長が兼務）

初代 山口 末一 昭和三・二・一
 二代 渡辺 富治 昭和五・四・一
 三代 三好 茂 昭和三・四・一
 四代 横式 信義 昭和三・五・一
 五代 坂本不三男 昭和三・五・一
 六代 上野 秋造 昭和三・四・一

年 度	学 級	職員専任	入 学 者	生 徒 数	卒 業 生
23	1	1	15	15	0
24	2	2	14	24	0
25	3	2	29	33	0
26	3	2	16	41	0
27	4	3	21	47	2
28	4	4	27	59	13
29	4	4	33	79	12
30	4	4	25	87	10
31	4	4	33	76	15
32	4	4	41	88	9
33	4	5	48	96	7
34	4	6	50	115	13
35	4	7	30	109	11
36	4	7	7	73	17
37	4	7	24	69	28
38	3	6	0	31	8
39	2	2	0	15	4
40	1	2	0	10	0
41	1	1	0	0	0

東栄高等学校校歌 吉川鋼作詞 笈川洋一曲

(女声)

栄光映ゆる学園に 自主独立の旗のもと
 集いて学ぶ若人我等 勇みて起たむ若人我等
 高き婦徳めざしつ つ 希望の彼岸は遠くとも
 ともに磨かむこの庭に ともにきたえむこの庭に
 弥栄えあれ東栄高校 弥栄えあれ東栄高校
 弥栄えあれ東栄高校 弥栄えあれ東栄高校
 PTA会長 弥栄えあれ東栄高校

(男声)

日進月歩のうつしよに 我等が行手みな異なれど
 気高き理想いだきつ つ 使命果さむ彼の岸に
 弥栄えあれ東栄高校 弥栄えあれ東栄高校
 弥栄えあれ東栄高校 弥栄えあれ東栄高校

林 与市（昭和二十七年以来閉校まで）

滝の川高等学校 昭和二十三年十一月一日、滝川女子高等学校

の分校として、滝川第二小学校に設置、二十五年四月、滝川東高等

学校滝の川分校となる。

昭和二十七年四月一日、滝の川分校は滝川第二小学校より、滝川

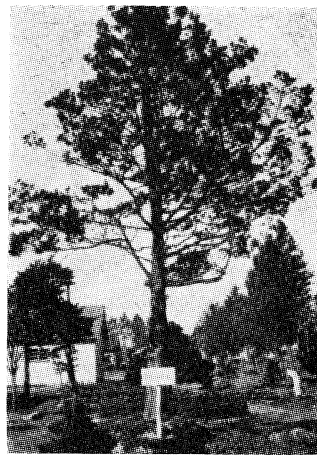
＜東栄高開校以来の状況＞



働きそして学ぶ

西高等学校に移管併置、同年十一月一日には分校名を廃し、第二種高等学校とし、北海道滝の川高等学校と呼称するに至った。

創設されて間もなく入学志望者の激減、存廃の問題も出たが、農村青年子女の教育の重要性に立って、町立の分校が道立高等学校において授業を受けるといふ配慮までなされ、滝



季節閉課記念植樹の「ひば」

の川高等学校として独立し、季節制高等学校の歩みが整えられていった。しかし、移管後においても地域社会への呼びかけ啓蒙にもかかわらず、応募の状況はまことに、

物さびしいありさま、道教委においては定時制の統廃合が検討され、本校に対しても募集停止の勧告が発せられるに至ったが、本校の着実な歩みとPRにより、新入生の数もふえて昭和三十年四月、本校創立以来生徒数一〇〇名を超え、関係者は前途の洋々たるものを感じ、漸く安緒の思いを浮かべることができたのである。

一難去ってまた一難、道立高校校舎を町立高校が使用することに

＜年度別生徒の状況＞

年 度	入学者数	総生徒数 (年度末)	卒業者数	備 考
昭和二十三年度	二六	八	〇	入学者中残ったもの九名 入学者中残った者は六名 卒業生は東高校定時制卒業 西高校移転第一年度 逐年移管開始
昭和二十四年度	一五	一七	〇	
昭和二十五年度	三六	二二	〇	
昭和二十六年	一六	一三	一	
昭和二十七年	二〇	三二	五	
昭和二十八年	三〇	五二	四	
昭和二十九年	二一	六五	〇	
昭和三十年	三九	一〇	一八	
昭和三十一年	六五	二八	二〇	
昭和三十二年	六八	一五	一六	
昭和三十三年	五六	七一	二四	

ついで指摘され、道教委の意向は次の二点にあった。すなわち①使用校舎を町立学校に移すことか、②現在どおりの運営を続けていく以上、道立移管の手続きを採ること。ただし一定条件の履行を必要とする、というものであった。

その後種々検討が繰り返され、昭和三十一年度より滝の川高校の募集を停止、昭和三十四年同校を閉校し、三十年以降の滝の川高校卒業生はすべて滝川工業高校の卒業生として出すことなども確認された。なお、廃止の日は昭和三十四年三月一日となっている。

道立移管第一年度の昭和三十一年四月入学生は、滝川工業高等学校季節制課程と総称され（電気・農業・家庭 新しい希望のスタートがなされたが、四十年から生徒募集を停止され、四十三年三月閉課となる。

歴代校長（滝川女子高校・滝川東高校滝川西高校・滝川工業高校長が兼務）

- 初代 山口 末一 昭和三二・三三
〃 〃 〃 三五・三三
 - 二代 渡辺 富治 昭和三五・四一
〃 〃 〃 三七・三三
 - 三代 宮田 新一 〃 〃 三七・四一
〃 〃 〃 三三・四五
 - 四代 玉田 智雄 〃 〃 三三・四一
〃 〃 〃 三三・四五
 - 五代 滝沢 文彦 〃 〃 三三・四一
〃 〃 〃 三三・四五
- P.T.A会長 峰村国太郎（昭和二八・二九設立、昭和二九年度）
〃 〃 〃 三一年度

3 滝川北高等学校と沿革

江部乙屯田兵共有財産の寄贈により、その収益を村費に充当し、負担の軽減、村発展の費途にあて、永く子孫の幸福をとの願いをもとにした村有財産が、自作農創設の法制定により漸次解放しなければならぬ情勢となり、基本財産売却代の一部で学校創設、残額に対する利子を経営費に充当、理想農村建設に役立つ農業学校の設置へのねがいは、戦争で実現に至らず終戦となる。その後再燃した創設の熱情は、議会の議決を経て文部大臣に設置申請、昭和二十一年三月三十日、北学一五号をもって許可を得るに至った。

村立江部乙農業高等学校 昭和二十一年四月一日、江部乙村立北辰農業学校（全日制農業科一問口）が北辰小学校を仮校舎とし開校し、実習施設はとりあえず同校大家畜舎、飼料舎、堆肥場、小家畜舎、農具舎を使用、農業用地として、東十二丁目旭沢、西十三丁目沼の端の町有地を充て開墾の鍬をふるう。

その後、同年十二月、北辰小学校より青年会館を仮校舎として移転、消防会館も仮教室として使用し、漸く授業を行き状態であっ

た。

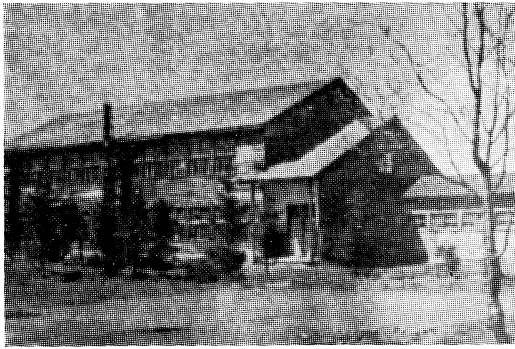
しかし、貨幣制度の改革、インフレの急速な亢進により日々物価高騰するというありさまで、村の財政も相当な財源難に陥っており、校舎建築、学校経営資金計画にもくいちがいを生じ、早くも存廃の岐路に立たされたが、村議会でも激論の末、存続を計ろうとの決断がくだったという経過もある。



昭22.11.3制定

二十三年二月二十六日、財団法人雲柱社（元芽生村藝）より東十三丁目の土地、一五町二段八畝二四歩を校地、実習地として、無償にて寄付採納される。

校舎については、計根別の旧陸軍飛行場兵舎の払下げを受け充当することとし、解体・輸送も完了、東十三丁目芽生ヶ丘に、二二四・



江部乙高等学校旧校舎



昭25.10.1制定



昭23.11.15制定

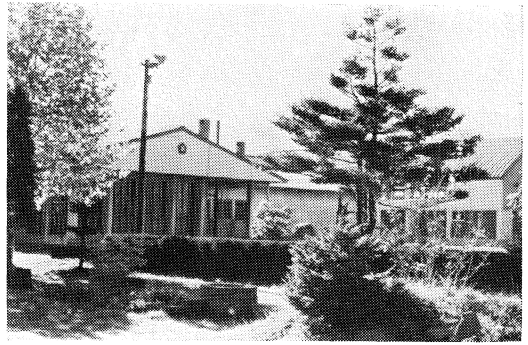
七五坪の本校校舎が、教具備品などの新調を含め約三百五十万円をもって、二十三年十二月に完成。翌年一月十九日移転することができ、その年十月十二日附属舎三棟八八坪、工費七十二万余円で完成、越えて二十五年工費一八〇万六、〇〇〇円をもって、三教室八五坪を増築、漸次校舎の完備をみる。

昭和二十三年四月一日、学制改革により村立江部乙農業高等学校と改称、同年十月三十日、定時制課程農業科（一間口）設置、二十四年四月一日には全日制課程家庭科（一間口）設置され、二十五年七月二十四日、江部乙村立江部乙高等学校と改称する。

こうして、一応安定してきたが、村財政上の観点からも道立移管の問題が、村民一般からも強い盛りあがりをもせたが、多額の費用を投じて増改築及び新築することや校舎位置の適当であるかどうか等むずかしい問題がおこってきた。

加えて、全日制を廃して定時制のみに切替えをとの勧告、その事のぜひについて論をなす者、あるいは道立移管までに要する経費のあまりに老大なるを考え、村財政の破綻を生ずるのではないかと憂慮する者等敷地問題を含め混沌とし、その帰趨統一するを知らない状態に立ち至り、二十七年三月二十六日、地方自治法に基づく公聴会を開催したが、その論述内容として全員がいずれも全日制を併置、道立に移管する趣旨賛成の意を表し、無謀な計画を強行することなく、正確な調査計画に基づいた最善の策が望まれた。

昭和二十八年四月一日、定時制普通科（一間口）の設置がなされたが、翌二十九年四月一日、この募集を停止。また懸案の道立移管も



江部乙高校校舎

高校建築の起債見通しがつくに至り、その実現にむかって、校舎敷地も東高台に移し、内部施設を含め工費約四千万円、総延べ建て坪附属舎を含め一千百八十余坪の近代的校舎の建設へと歩みが進められ、町民多年の念願に明るい曙光を見出すに至ったのである。

北海道江部乙高等学校 昭和三十三年四月一日、道立に移管、同年五月五日開校十周年、道立移管

記念式典を挙行。三十八年四月一日、定時制農業科の募集を停止、全日制園芸科設置、家庭科を家政科と改称する。

昭和三十九年四月一日、全日制課程家政科（一間口）増設、四十二年四月一日、全日制農業科の募集を停止し、全日制課程被服科（一間口）を設置する。

北海道滝川北高等学校 昭和五十三年四月一日、滝川北高等学校と改称、園芸科、被服科募集停止、全日制課程普通科（一間口）を設置。五十四年二月十六日、屋内体育館・生徒玄関改築竣工する。

校歌 百田宗次作詞 千葉日出城作曲（昭和二三・八・一一制定）

一、空知野 ここにひらけ
雲白し イルムケブ
枝なめて たわわに
苹果みのるところ
栄えあれ 我等が滝川北高校

二、みどりの光あふれ
地のめぐみ つぎるなし
陽に灼きて 春秋
土にきわめはげむ
誉れあれ 我等が滝川北高校

第一章 学校教育



滝川北高校校舎

※歌詞中「江部乙高校」を、昭和五十三年四月一日より「滝川北高校」と訂正する。

歴代校長

初代	市原 達夫	昭和二三・四四
三代	岩田 武次	〃〃三三・四五
五代	伊藤 信雄	〃〃四四・四五
七代	太田 義夫	〃〃四三・四九
九代	中原 勝郎	〃〃四三・四四
二代	高橋 保雄	昭和三七・四五
四代	大沢 賢勝	〃〃四三・四五
六代	川原 イト	〃〃四四・四九
八代	折笠 輝夫	〃〃四三・四四

開校以来三十有余年、学科変更の変遷を経ながらも、生徒の活躍は盛んで、特に体育方面では、スキーでオリンピック候補に推される者、地区大会で優勝、全道大会で立派な戦績を残した柔道部、卓球部の黄金時代、高体連全国出場の棒高跳び・四〇〇メートル。全国家庭クラブ研究発表大会北海道代表などが特筆されよう。

校章 りんごと稲穂は江部乙の農業を表し、北海道（北極星）という厳しい自然条件を克服して、立派な農業後継者たらん決意を表明するものとし、北辰農業学校校章が、昭和二十二年十

卒業生徒数

年度	学科					
	農業	園芸	家政	被服	(定時)業農	(定時)普通
23	(旧)8					
24	(旧)7					
25	46					
26	29		4		12	
27	51				18	
28	57		7		19	2
29	23		11		14	7
30	33		20		9	2
31	36		48		14	3
32	44		38		27	
33	40		57		27	
34	41		50		32	
35	33		53		34	
36	35		50		27	
37	37		44		23	
38	43		44		26	
39	37		52		12	
40	36	40	90		37	
41	35	34	105			
42	45	35	99			
43	37	38	100			
44		37	92	41		
45		31	92	40		
46		33	85	42		
47		20	83	39		
48		31	87	37		
49		25	85	44		
50		22	86	27		
51		16	78	37		
52		25	81	30		
53		28	71	16		
計	794	415	1,712	353	331	14
総計				3,619		

一月三日に制定されたが、学制改革により江部乙農業高等学校となり、二十三年十一月十五日校章改正、昭和二十五年江部乙高等学校と改称するに至り、前のりんごと果実と葉を花びらとし図案化して、ふちどりをし、同年十月一日、校章再改正がなされた。

4 滝川西高等学校と沿革

私立北海道滝川商業高等学校 昭和三十三年七月一日、滝川町は

待望の市制施行によって、急速に商業都市として躍進しつつあり、経済・文化の面においても中空知の中心として発展の一路を歩むに至った。

浴し得ない中学生もふえつつあったときなので、地域社会、父母など各方面から非常な期待をもって迎えられた。

同年八月一日認可申請書提出後、秋の取り入れを待って着工、冬期に入って普通教室七、管理室三など一、二八三平方メートルが竣工、三十四年一月十九日付待望の「学校法人今野学園滝川商業高等学校」の設立認可となったのである。

この間、今野正義は文字どおり東奔西走、八面六臂の毎日で、その非願は達成され、現在まで道内高校にも滝商の名をはせ、多くの人材の育成に尽力され、その労苦は想像以上のものがあり、功績は高く評価されてよいであろう。

地方産業、教育文化の向上に寄与するためにも、商業人育成のための商業高校の必要を痛感し、次代をなう有為人材を世に送り出すことが、産業経済の発展につながるものであると、今野正義は有志と相談し決意を固め、あらゆる障害を克服し、種々の困難に直面しつつ昭和三十三年八月、設立準備に着手した。

時あたかも、進学率の上昇、児童数の増加により、教育の機会均等が叫ばれながらも、その恩恵に

校章（昭和三十四年三月制定）



一番下の台になっているのは、滝川の市章を用い、その上の両端の羽は鷺の羽で、松明にまつわりついているのは蛇である。これはギリシャ神話に出てくる商業の神様であり、誰にも負けない「力強さ」と未来にむかって「雄々しく羽ばたけ」さらにへビのような「忍耐強さ」を持つての意味をこめている。

校歌 今野正義作詞 須磨 絃（江良正雄）作曲（昭和三十四年三月制定）

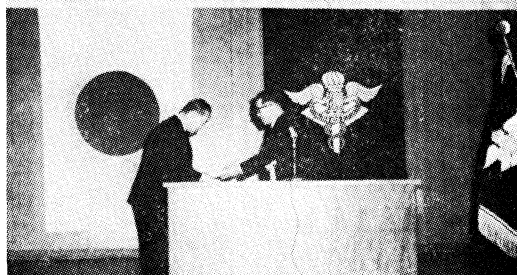
- 一、流れてやまぬ石狩川の 歴史は古き空知野の 窓をあけて照せ文化の松明
- 我等はもとめん 理想郷
- 二、真理のともしび高く持ちて 高き理想の道を行く 望めよはるかな知識の燈台
- 我等はもとめん 学び舎に
- 三、そよ風かおる歴史の園 香しき哉 校風は 空知野の虚空に高くかおるなり
- 我等は求めん 理想郷

昭和三十四年第二期工事として、体育館普通教室等一、五八三平方メートル。三十八年三月十日、第三期工事校舎一、九二六・四四平方メートル。同年五月三十一日、第四期工事六教室、六〇八・二六平方メートル。昭和四十年一月三十日、新体育館鉄骨ダイヤモンドトラス造り、地下野球練習場併設一、七五四・二三平方メートルの竣工式。四十三年十月、三十四年度建設体育館を移転改築し、第二体育館八五八・六〇平方メートルとする。

同年十月十六日、新校舎建設工事地鎮祭を行い、四十四年九月二十五日、十周年記念事業として、特別教室、管理室鉄筋コンクリー

第一章 学校教育

滝川商業高等学校閉校並に野学園解散



解散閉校式

ト三階、一部七階（時計塔、天文台）
二、六七五・九九平方メートルが完成、校舎総面積九、六三一・五五平方メートル、校地面積四万四、七三〇・八二平方メートルとなる。

生徒の激増と減少 昭和三十八、九年ごろから増加の傾向にあった生徒数は四十一年に至り、ついにピークに達し、志願者数実に二、〇四八名、入学者五六八

名、翌年も一、九一六名の志願者が殺到し、六一〇名が入学といった状態となり、総数一千六百七十余名の一大マンモス高校に、ふくれあがったこともあったが、炭鉱合理化、閉山。減反による離農など人口減少と入学者の激減は大きく影響し、昭和四十七年は募集定員三五〇名にも拘らず、最終入学手続き二二一名と、本校開設以来初めてその定員を割る状態となった。

さらに、人口減少に伴う小中学校児童・生徒の激減は、四十九年度以降、下降線をたどる一方であることが判明して、学園経営は文字どおり危機に直面してきた。

市立移管決定 不測の事態に充つべき、特別財源の減少を補填しておくため、第二体育館の寄贈（現西町福祉会館）に伴う措置によって、一時これを糊塗し得るとはいえ、種々検討の結果、市当局及

び市議会に四十八年四月一日より、市立として移管して欲しい旨の陳情を行い、さらにPTA及び教職員組合からも、現職員全員の採用を含む同趣旨の陳情書を提出、市長は市議会に上程するとともに文教厚生委員会に附託して審議をなすこととなる。

こうして、慎重審議の結果、①入学間口は商業科六間口とし、募集定員は二七〇名とする。②建物その他学校資産はそのまま引き継ぐものとする。③在籍する生徒は全員入学するものとする。④授業料その他諸負担金は道立並みとする。⑤教職員は公立学校教職員としての採用試験を受ける。⑥校名は北海道滝川西高等学校とする。

との内容のもとに、昭和四十七年十一月十日、満場一致この陳情を採択する旨可決、十一月十五日に「滝川市立移管」に決定をみた。

滝商強し

そして、伝統を作り、栄光に輝く「滝川商業高等学校」は、その十四年の歴史に、昭和四十八年三月二十日、閉校式によって終止符を打ったのである。

滝商ここにあり 僅か一四年の歴史ではあったが、体育・文化活動は広く盛んで、全道的にも連続四回出場の野球部、珠算大会の優勝などをはじめ多くの戦績はいずれも素晴らしく、しかも広範囲である。

特に、スキートの回転・ジャンプは全国にその名をせ、日本スキー界の雄として活躍。また、絵画部門での推奨獲得はもちろん、全国各弁論大会における数多い優勝・優秀賞、柔道新人戦全国出場など、限らない称賛をおくると共に「滝商ここにあり」を、いつまでも忘れてはならない。

理事長 今野 正義
歴代校長

初代 桜庭亥一郎 昭和四三・四四
三代 広井 潔 〃〃四三・四四
二代 串崎 広士 昭和四四・四五

入学志願者と入学者

年 度	志願者数	入学者数
昭和34年	650	357
〃 35 〃	563	298
〃 36 〃	498	271
〃 37 〃	964	540
〃 38 〃	1,422	539
〃 39 〃	1,786	563
〃 40 〃	2,048	557
〃 41 〃	1,916	568
〃 42 〃	1,777	601
〃 43 〃	1,507	510
〃 44 〃	1,548	450
〃 45 〃	1,176	398
〃 46 〃	1,038	380
〃 47 〃	933	220
計	17,826	6,252

北海道滝川西高等学校（滝川市西町六丁目三番地）

沿革の概要 昭和四十七年十一月十五日、滝川市議会において滝川市立学校管理条例の一部を改正し、北海道滝川西高等学校の設置を議決する。

翌年一月十八日、設置認可（道教委四八教官第一〇〇四号指令）を受く。

昭和四十八年四月九日、開校・入学式及び父母と教師の会発会式が挙行される。入学者第一学年二八二名、旧滝川商業高校より転入

卒業生の状況

第1回卒業の37年より48年3月閉校まで

家事従事者	進学者数	就職者数	卒業生数	卒業期		
26 19 45	22 8 30	133 87 220	181 114 295	男女計	1	37年
27 50 77	19 6 25	101 52 153	147 108 255	男女計	2	38年
6 7 13	24 12 36	113 72 185	143 91 234	男女計	3	39年
14 20 34	40 8 48	202 198 400	256 226 482	男女計	4	40年
9 34 43	45 17 62	239 160 399	293 211 504	男女計	5	41年
22 42 64	37 20 57	216 197 413	275 259 534	男女計	6	42年
6 14 20	45 69 114	180 206 386	231 289 520	男女計	7	43年
8 24 32	55 34 89	195 205 400	258 263 521	男女計	8	44年
11 10 21	45 35 80	246 204 450	302 249 551	男女計	9	45年
7 18 25	32 31 63	209 172 381	248 221 469	男女計	10	46年
4 13 17	44 33 77	159 159 318	207 205 412	男女計	11	47年
5 16 21	39 26 65	125 149 274	169 191 360	男女計	12	48年
145 267 412	447 299 746	2,118 1,861 3,979	2,710 2,427 5,137	男女計	計	

生、第二学年二二三名第三学年三四九名となり、六月十日には開校記念式典を行う。

昭和五十二年一月二十八日、普通科二間口設置認可（商業科を学科転換）され、昭和五十二年入学より普通科二間口、商業科四間口となる。

昭和五十三年三月二十日、鉄筋三階建て（生物・化学・物理・商品実
 験室及び格技場）竣工する。

主な歩み 開校以来日は浅いが、旧滝川商業高校の施設・設備を活用、さらに充実を図り、昭和四十八年十一月滝川西高テレビ局開局（普通教室一八教室にVTR-TVを設置）。四十九年七月には、全道



滝西高等学校祭の行燈行列風景

業高等学校は、爾來、北海道における商業教育の振興と中堅産業人の育成につとめ、卒業生五、一三七名を社会に送り地域の発展に貢献してきたところであるが、社会情勢の変化に即応し、昭和四十八年三月三十一日一四年にわたる校史を閉じ、同四月一日をもって滝川市に移管の議が定まり、北海道滝川西高等学校として、新生の第一歩を踏みこととなった。

本校の発足にあたり滝川商業高等学校の光輝ある伝統を受け継ぎ有為な国民の育成をめざしもって地域社会の期待にこたえんとするものである。

ここに学校法人今野学園の建業を顕彰し、建学の精神が本校によって未来永遠にわたり光彩を放つことを祈念するものである。

昭和四十八年六月十日

開校記念の日に

滝川市

第五節 青年学校・その他

青年訓練所 大正十五年四月一日、青年訓練所令制定。同年七

月一日、全国一斉に青年訓練所という教育施設が、各小学校に併置開設され、当該学校長が主事に任命された。

青年訓練所は、軍隊の予備教育という性格をもち、男子だけを対象とし、青年の心身を鍛錬し国民としての資質を向上させることを目的としたもので、教練を中心とし、修身公民科、国語科、算数科、職業科が課せられた。

滝川においては、滝川第一訓練所以下第二、第三、第四と訓練所が設置され、江部乙においても北辰小に第一、東陽小に第二訓練所が設置され、各所主事、指導員を任命、毎月訓練日を定め、訓練の実績を挙げ、毎年連隊区司令部から査閲官が派遣され、その実情を査閲し、この成績は主事である学校長はもちろん、町村長の評価にもつながり、緊張したものである。

青年学校 昭和十年四月一日、青年学校令が公布され、訓練所は廃止された。

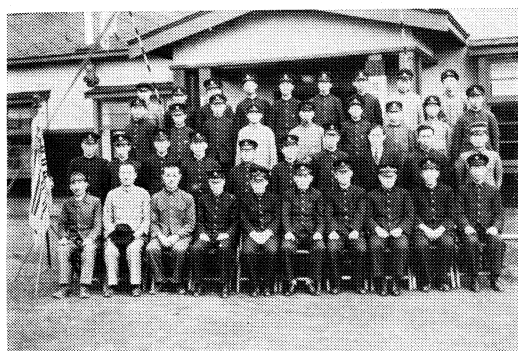
当時、満洲事変、国際連盟の脱退など国内は日を逐って緊張の度を増し、青年教育はいよいよ重視され、青年学校は男女に対し、その心身を鍛錬し、徳性を涵養すると共に、職業及び實際生活に必要な知識技能を授けるなど、国民としての資質向上を目的とした。

生徒は大部分が勤労青年であるため地方の実情など充分考慮されていた。その課程は普通科・本科・研究科の三つからなり、尋常小学校（六年）卒業の者は普通科（二カ年）、高等科を出た者は、本科（男子五カ年、女子三カ年）その上に研究科（二年又は二年）があり、六年生卒業の者は、そのあと七年間は青年学校に籍をおくというしくみ

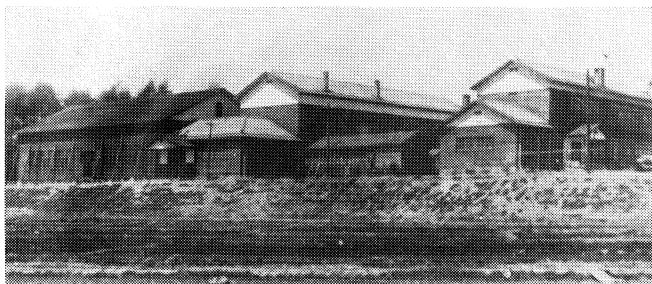
になつていて、そこを終わる年は、満二〇歳で徴兵検査となり、軍隊に入るとのことになつていたのである。

次に昭和十四年四月から満一二歳から満一九歳までの男子は義務制になり、戦時下の男女青年の教育に強力な拍車がかげられ、軍事教育も一層重視されてきたが、昭和二十二年学制改革に伴い廃止された。しかし、青年学校卒業者は、往時の中等学校卒業と同等な学力と認められ、青年師範入学資格が与えられていた。

滝川鉄道錬成所 昭和十四年、青年学校義務制が実施されたが、鉄道に勤務する該当年齢者は勤務の関係で国民の義務を履行できない状況から、鉄道局としてこれら該当者を集め、青年学校の教育を



錬成所開設入所式



滝川鉄道錬成所



PTA会員による環境整備

施し、鉄道員としての資質向上を考え、鉄道錬成所を各要所に設置した。
生徒は滝川駅を中心に、根室線は新得まで、函館線は妹背牛、右岸線雨竜、浦臼までの各駅勤務高小卒の適齢者約千名であつた。

保護者会・後援会・父母と先生の会

従来、保護者会、後援会などとして、学校教育の振興発展に尽力してきたが、昭和二十二年、アメリカ教育視察団の勧告により「父母と先生の会」と改称、各PTAは自主性をもち、研修を深め、学校教育の充実適正を期するため、教師と父母が協力、また連合会を設け連携しあい、今日に至っている。

滝川第一小学校PTA会長

- | | |
|------------------|------------------|
| 初代 大橋 武義 昭和三〇年度 | 二代 中川 正 昭和三〇年度 |
| 三代 岡部 潔 三〇～三一年度 | 四代 岩本 正義 三〇～三一年度 |
| 五代 佐野 一夫 三一年度 | 六代 草浦 正巳 三一年度 |
| 七代 柴田 政雄 三一年度 | 八代 木田 茂 三一年度 |
| 九代 朝日 昇道 三〇～三一年度 | 〇代 東 金次郎 三〇～三一年度 |
| 二代 前田 博正 三一年度 | 三代 辻奥 幸男 三〇～三一年度 |
| 三代 近藤 輝雄 三一年度 | 四代 三上 幸男 三一年度 |
| 五代 後藤 良郎 三〇～三一年度 | 六代 野瀬 武二 三〇～三一年度 |
| 七代 中川日出吉 三一年度 | |



江部乙小学校スクールバス

東小学校PTA会長

初代 林 喜久男 昭和五三・九〜現在

江部乙小学校

一、北辰小学校保護者会・PTA会長

岩橋 浅次 大正八年以降

大崎 栄吉 昭和六年以降

三沢貫之助 一四年以降

初代 平野 庄一 昭和二一年度

三代 宮崎 定由 三三年度

五代 平手 登 四〇年度

七代 森井 正之 四八年度

二、東陽小学校PTA会長

初代 村上寅之進 二代 谷口 礼穂

三代 吉岡 重信

上田梅次郎 大正一五年以降

黒田 策一 昭和一二年

二代 早弓 房松 昭和二五年度

四代 寺崎 政朝 三三年度

六代 石田 利雄 三六年度

八代 大野 秀雄 三九年度

四九年度

四代 舟山 一夫 五代 横山 守

※東陽中学校があつたときは、中学校のPTA会長は同じである。

三、旭沢小学校PTA会長(昭二五・四〇四七・三)

初代 祖母井京太郎 二代 中村 一馬 三代 及川 孝七

四代 北江 正雄 五代 及川 孝七 六代 工藤 明

七代 清水常五郎 八代 柴田 秋良 九代 武田 順匡

〇代 末富 太

江部乙小学校PTA会長(昭和五〇・四)

初代 国島 賢二 昭和五〇・三 二代 寺崎 雅聡 昭和五〇・三 現在

江陵中学校PTA会長

初代 鈴木初太郎 昭和三・七 二代 寺田 文人 昭和三・七

三代 大橋 武義 〇・四 四代 芳村 良範 〇・七

五代 東 金次郎 〇・四 六代 中村 正直 〇・三

七代 水谷 五一 〇・四 八代 中川 斉 〇・四

九代 鈴木 英市 〇・四 〇代 前田 博正 〇・四

二代 日野田通正 〇・八 三代 寺口 章 〇・四

三代 伊藤 孝 〇・四 四代 木戸 清一 〇・三

五代 高畑 鉄雄 〇・四 六代 坪田 巧 〇・三 (現在)

明苑中学校PTA会長

初代 橋本徳四郎 昭和三・八 二代 柴田 棟造 昭和二四・九

三代 五十嵐一郎 〇・四 四代 田端 武 〇・六

五代 佐藤民治郎 〇・四 六代 中山 定一 〇・三

七代 藤本 清一 〇・四 八代 居林 清 〇・四

九代 木井 紘策 〇・六 〇代 外山 忠男 〇・六

二代 渥美 孝一 〇・四 三代 中山 弘三 〇・四

三代 今野 陽一 〇・四 四代 次田 良敏 〇・四

五代 辻奥 幸雄 〇・四 六代 近藤 輝雄 〇・四

七代 計良 邦雄 〇・四 八代 長田 勇 〇・四 現在

開西中学校PTA会長

二代 梅木 義雄 昭和四七年度 三代 石川 清 昭和四八・二一

三代 但田 信行 〃 四九・一 四代 村田 正男 〃 〃 四九年度

五代 松浦 谷松 〃 五二年度 一六代 下 幸二 〃 〃 五三〃

滝川商業高等学校PTA会長

初代 藪内 喆夫 昭和三六 〃 〃 三六 二代 柴田 政雄 昭和三七 〃 〃 三七

三代 山下 正吉 〃 〃 三六 〃 〃 三六 四代 石坂 繁夫 〃 〃 三六 〃 〃 三六

五代 中村 正男 〃 〃 三六 〃 〃 三六 六代 渡川 勝石 〃 〃 三六 〃 〃 三六

七代 大草一二三 〃 〃 三五 〃 〃 三五 八代 樋郡 英雄 〃 〃 三五 〃 〃 三五

滝川西高等学校PTA会長

初代 樋郡 英雄 昭和三六 〃 〃 三六 二代 上西 正夫 〃 〃 三五 〃 〃 三五

三代 森 憲明 〃 〃 三四 〃 〃 三四 現在

父母と先生の会連合会

江部乙町PTA連合会 新教育制度後、歲月も浅く六三制に伴

う教育施設もまた不充分で、教員の待遇についても、住宅その他改善を要する等、数多くの問題点があった、北辰小学校PTA会長早弓房松は、北辰中学校PTA会長森本茂喬と相はかり、こうした問題を町全校PTAが連絡提携の上、対等に検討協議しようとして、他小中学校PTAに働きかけ、昭和二十四年四月創立のはこびとなる。

P連は協議体であるとし、その共通目的は、(ア)学校教育の格差をなくすこと(設備、教材など)、(イ)教育の待遇を改善する(住宅、その他)、(ウ)一般的教育の向上を図る(学校遊園地の造成、不良化防止対策の推進など)

にあたることとした。

歴代会長

初代 早弓 房松 昭和三四 〃 〃 三四 二代 宮崎 定由 昭和三五 〃 〃 三五

三代 寺崎 政朝 〃 〃 三四 〃 〃 三四 四代 長谷川武次 〃 〃 三六 〃 〃 三六

五代 吉岡 重信 〃 〃 三四 〃 〃 三四

滝川市父母と先生の会連合会 滝川市のP連が発足したのは昭和

和二十二年八月三十日で、当時は第一小学校のPTA会長が、P連会長をつとめ、昭和三十年八月滝川市学校給食連合会の設立、二十九年の学校林維持委員会の設立などで、他の学校PTA会長が、P連の緊密な連携と教育の振興にあたってきた。

・滝川市父母と先生の会連合会会則(一部抜すい要約)

本会は、各学校父母と先生の会の自主性を尊重し、その緊密な連絡を図り、教育振興に寄与するを目的とし、この目的達成のため、次の事業を行うこととした。

- (1) 民主教育の理解と推進について、
- (2) 会員相互の教養向上について、
- (3) 児童・生徒の福祉増進について、
- (4) 教育費の充実について、
- (5) その他目的達成に必要なことについて、

本会には次の役員を置きその任期を一カ年とし、補欠役員の任期は、前任者の残任期間とする。会長一名、副会長三名、常任幹事若干名、幹事若干名、事務局長一名、監査二名で、会長・副会長・監査は総会で選出するとなっている。

常任幹事は、単位父母と先生の会幹事中心よりP一、T一とし、本会業務の執行にあたり、幹事は本会業務を審議し、事務局長及び事

務局員は会長所属の学校職員中より会長が委嘱し、その一名は会計業務を担当、監事は単位父母と先生の会の監査から選出している。

なお、本会会則の主旨を生かし計画性をもって、(1)高校部会を設置(市内高校の生活、進路、研修など)、(2)小中高の連絡(生活・進路など)、

(3)その他単Pとの連絡(単P研、校外指導、その他)を行い、また、上級機関及び他機関との連携を密にし、市P連の活動促進、教育振興に寄与するため、(1)北海道PTA研究大会、全空知PTA研究協議会、中空知PTA研究会を通し、道・全空P連との交流を深め研修する。(2)中空知P連と連携を密にし、教養の向上・児童生徒の福祉増進をはかる。(3)市に対し教育施設・設備・教育予算の増額を要望し、教育振興に寄与する。

さらに、各単P間の親睦をはかるため、(1)市理事者を含め、総会・教育懇談会・懇親会をもち、市P連の理解を深め親睦を深める。(2)中空知・移動PTA理事会などを業務とし、その推進を図っている。

歴代連合会長

初代	大橋 武義 (滝一小)	昭和二二〜二四年度
二代	中川 正 (滝一小)	二五〜二六
三代	岡部 潔 (滝一小)	二七〜二八
四代	不詳	二九〜三一
五代	佐野 一夫 (滝一小)	三二
六代	中村 正直 (江陵中)	三三
七代	水谷 五一 (江陵中)	三四〜三八
八代	東 金次郎 (滝一小)	三九〜四〇
九代	前田 博正 (江陵中)	四一〜四二
二代	岩 克美 (開西中)	四三

第一章 学校教育

二代	高津 章慈 (開西中)	昭和四四 年度
三代	樋口 昭二 (滝二小)	四五
三代	須賀 忠夫 (滝二小)	四六
四代	梅野 重勝 (江部乙中)	四七
五代	村田 正男 (江部乙中)	四八
六代	近藤 輝雄 (明苑中)	四九〜五〇
七代	高平 克己 (東栄小中)	五一〜五二
六代	坪田 巧 (江陵中)	五三〜五四

※昭和五十一年度より滝川工業高校以外の高校が加入、五十三年度より滝工高も加入、市内小・中・高全校加入の連合会となる。

特学等の育成後援団体

滝川市手をつなぐ親の会 知恵おくれの児童、生徒に特殊教育を施し、社会生活に順応できる能力を与えるため、父兄に協力し愛情ある活動の促進をめざし、昭和三十九年九月に結成、同四十六年に江部乙町・滝川市合併に伴い、江部乙町手をつなぐ親の会(会長平手登)を合わせ、全市的体制となる。

重点目標として、(ア)教材・教具等の整備・充実に援助する。(イ)各種の職場見学を実施し、適応性の発見に努める。(ウ)団体生活の体験・学習を促進する。(エ)保護者の研修、講習会実施をかね、結成当時一、二〇〇人の会員も、五十四年には二、〇〇〇人となっている。

組織としては、会長(PTA会長) 副会長(各小中PTA会長) 理事(各小中学校教頭)、相談役として各小中学校長がなり、会員には各校PTA会員及び趣旨に賛同する一般市民・団体がある。

事業概要としては、北大から医学講師を招き、医学的角度から父

現在、市内には主に町内会ごとに約百の子ども会があるが、これらの子供が自発的に計画し実行するよう、父母がバックアップし、小学校区毎に父母の連絡会をつくらうとするもので、市教委では、さらに第一小、第二小、東小、西小の校区にも父母の連絡会をつくり、子供会活動を盛りあげたいと考えている。

奨学資金制度

一 江部乙町奨学資金制度 本町民の子弟にして、向学心に燃え、その能力が充分なるにもかかわらず、経済的理由により修学困難なる学生又は生徒に対し奨学資金を貸与し、修学を奨励する目的をもって江部乙町奨学資金条例を設定、昭和二十九年四月一日より施行した。

奨学生の条件、(1)大学院、大学及び高校等に在学、又は進学を希望する者、(2)学資に乏しいもの、(3)身体健康、学業優良、性行善良である者。

奨学資金 (1)大学院の学生及び大学生 月額五、〇〇〇円以内
(2)高等学校の生徒 月額一、五〇〇円以内

基金の積立て (1)奨励資金寄付金の全額、(2)貸付金償還金の二分の一の金額、(3)基金から生ずる収益金。

運営委員会の構成 (1)議会(議長、副議長、文教委員長)、(2)民生委員会(委員長、副委員長)、(3)教育委員会(委員長、副委員長) (4)学識経験者(教育長、北辰中学校長、東陽中学校長)

昭和三十九年四月一日、条例一部改正により、奨学資金に関する事務を教育委員会に移管することとなり、奨学資金運営委員は、三

貸付の状況

年度	申込者数		貸付者数	
	大学	高校	大学	高校
31	1	3	0	1
32	0	0	0	0
33	3	2	2	1
34	2	7	1	5
35	5	5	1	4
36	2	1	2	1
37	7	15	3	5
38	8	3	0	4
39	5	6	2	5
40	10	8	2	5
備考	昭和31年度 高校月 700円 " 33 高校月 1,000円 大学月 2,000円 " 36 高校月 1,500円 大学月 3,000円			

※昭和三年から滝川市合併までに六人に貸付した。金について規定することを目的とする。

本市から学資の貸付を受ける者を「奨学生」といい、貸付する学資を「奨学金」という。

奨学生の資格 奨学生は本市市民の子弟であつて次の各号に該当するものでなければならない。

- (1) 大学又は高等学校に在学する者、
- (2) 学資の支弁が困難であること、
- (3) 身心共に健全であること、
- (4) 学業成績優秀であり、かつ、品行方正であること。

奨学生の選定 奨学生は、その在学する学校又は在学した学校長

十九年三月三十一日をもって発展的に解消され、三十九年度以降は教育委員会で選考、町長と協議の上決定することになった。

二 滝川市奨学金貸付条例(昭和四六年四月一日条例第一〇九号)

能力があるにもかかわらず、経済的理由により、修学困難な者に対する奨学資

の推せんにより市長が決定する。

奨学金の額 奨学金の額は、本人の希望及び家庭の事情を考慮し

滝川市奨学金貸付状況

区分 年度	高 校		大 学		
	貸付者数 (内数)女子	月貸与額	短大 貸付者数 (内数)女子	大 学 貸付者数 (内数)女子	月貸与額
41年度	6(1)	1,500			
42 "	8(7)	1,500			
43 "	8(3)	1,500		1	4,000
44 "	11(4)	1,500		8	4,000
45 "	12(5)	2,000	1(1)	8(1)	4,000
46 "	11(2)	2,000	2(2)	7	4,000
47 "	4(1)	2,000	3(3)	9	4,000
48 "	3	2,000		9(2)	5,000
49 "	3(1)	2,000	2(2)	8(1)	5,000
50 "	2	3,000	3(3)	7	7,000
51 "	3(1)	4,000	1(1)	9	9,000
52 "	1	4,000	3(2)	5	9,000
53 "	5(1)	4,000	3(3)	5	9,000
54 "	1(1)	4,000	5(2)	6(1)	9,000
			※短大・大学とも同額		

て、次の区分により市長が決定する。

- (1) 高等学校の奨学生に対しては、月額四、〇〇〇円以内、
- (2) 大学の奨学生に対しては月額九、〇〇〇円以内、

学術研究に適すると認められる者、また市長が特に必要があると認められる者に対しては、前項の金額をこえて貸与することができ(あと省略)。

江部乙町教育推進協議会

従来、本町学校教育推進には、町理事

者、議会をはじめ、その他各種関係機関、団体及び父兄の理解・協力のもとに種々な方策が講ぜられてきてはいたが、教育の内容にまで踏み込んだ正しい教育理念の把握とその具現についての理解・協力・実効を挙げるため推進母体が必要であるということから、空知教育推進計画の発表があったのを機会として、教育推進協議会の必要を認め、昭和三十三年四月十六日その発足をみたのである。

協議会の委員構成としては、教育委員全員、町長、議会議長、文教委員長、連P会長、各単P会長、各中学校長、北教組支部長、副支部長、文教部長、書記長、書記次長、各学校班長、各学校教研推進委員とし、昭和三十三年七月、教育推進協議会の名称を、江部乙町・教育振興会と改め、組織、機構、その他について主なものとは会則の示すとおりである(一部抜す)。

第二条 本会は江部乙町の实情に即して教育の振興を図ることを目的とする。

第三条 本会は左に掲げる者で組織する。

- 一、江部乙町内公立学校教育職員、

- 二、町長、教育委員、議会文教委員、連P会長、各単P会長

第四条 本会は、目的達成のため左の事業を行なう。

一、教育に関する調査研究 二、教職員の教養に関する研究懇談 三、児童、生徒の指導に関する事項 四、会員相互の連携 五、その他町内の教育振興に必要な事項

第六条 本会に運営委員会及び推進委員会をおく。

第七条 一、会長、副会長は推進委員会において選出する。二、運営委員、推進委員、書記は会長がこれを委嘱する。

推進委員会の委員は、町長、文教委員、連P単P会長、教育長、教育委員、学校長、支部長、副支部長、書記長、書記次長、文教科長(前文教科長)、学校班推進委員。

運営委員会の委員は、教育長、教委主事、連P正副会長、校長会代表、支部長、書記長、文教科長。

しかし、時代の推移と社会的状況に伴い、従来の教育振興会を改組するに迫られ、これを発展的に解消し、昭和三十九年五月一日、教育委員会内規をもって江部乙町教育推進委員会を組織、教育委員の主体性を確立、本町教育の推進を図ることになった。

(江部乙町教育推進委員会規則(第六条以下は省略))

第一条 この会は江部乙町教育推進委員会と称し、町立学校教職員をもって組織し本町の実情に即して教育の振興推進を図ることを目的とする。

第二条 この会の目的をよび研究に関する事項

- 1 教育に関する調査および研究に関する事項
- 2 教職員の教養の向上に関する事項
- 3 児童、生徒の学習、体育の向上並びに生活指導に関する事項
- 4 会員並びに教育関係機関相互の連絡強調に関する事項、
- 5 その他町の教育振興に必要と認められる事項

第三条 この会の事業遂行のため運営委員会を置く。

第四条 運営委員は毎年四月教育委員会が次の区分に従い委嘱する

- 1 学校長 四名
- 2 各学校より推せんされた教職員九名

第一章 学校教育

但し各学校の推せん人員の定数については次のとおりとする。

北辰小学校三名、北辰中学校三名、東陽小学校一名、東陽中学校一名、へき地校(旭沢小、北辰両分校)一名

第五条 委嘱された委員は委員会を構成し、教育委員会の指導のもとに、この会の事業推進母体となり効果的運営に努めねばならない。

滝川市教育振興会 当振興会の合併以前の経緯は、江部乙町教

育推進協議会の動向とはほぼ同様なので、昭和四十六年以降を主体に最近の活動概況を述べておきたい。

滝川市の教育振興のために、長年にわたって營々と努力を積み重ねてきたのが滝川市教育振興会で、この会は滝川市小、中学校職員及び市教委職員による滝川市における義務教育の振興と教職員の研究を深める目的のもと、活動目標達成のための研究・実践を推進する。

活動目標

- 1 児童・生徒の学力の向上をはかる。
 - (1)教育課程の充実及び弾力性にとむ教育計画の作成につとめる。
 - (2)教科指導法の向上のため研究をすすめる。
 - (3)特色ある学校経営・研究に対し助成をし、その成果の交流につとめる。
- 2 児童生徒の生活・文化・体育の振興をはかる。
 - (1)文化の振興と情操を高めるため、音楽会、展覧会、展示会等の行事を開催する。
 - (2)体育の振興と体力の向上をはかるため、球技・競技の交流をはかる。
- 3 教職員の研修をすすめる。
 - (1)部会研究を充実し、より豊かな教育活動の実践研究をすすめる、他校との交流をはかる。
 - (2)各学校の課題解決のための研修をすすめる。
 - (3)教育事情の視察・調査のため道内外に教職員を派遣する。
 - (4)教育講演会を開催し、視野の拡大と研修を深める。

研究部と行事部の二部門があり、それぞれ推進計画を立て、目標の達成を目指している。

研究部の事業計画は、(ア)、各学校の研究・実践を交流し、各教科各部門の研究推進のため部会を構成し、全教職員はいずれかの部会に加入する。(イ)、部会は、教科部会(国・社・数・理・音・美・保健・技家・英)、専門部会(事務・特殊教育・養護・学校経営)※上記いずれかに加入する。特別部会(進路・評価)※各校代表一名で構成

またこのほか、教育課程研究委員会を設置し滝川市小中学校教育課程の基底を作成、研究依頼校の設置、教育講演会の開催、会員の研修などを推進・実践している。

行事部では、市内小中学校児童生徒の学習活動、体位向上、文化活動の向上と交流をはかるため、作品展、音楽発表会、英語コンテスト及び陸上競技大会の運営委員を組織、各校関係職員協力のもとにその成果を高め、研究部と連携し行事を推進している。

滝川市教育振興会々則(一部抜すい)

第二条 この会は、滝川市における義務教育の振興、並びに教職員の研修を深め、資質の向上をはかることを目的とする。

第三条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

- (1) 教職員の研修に関する事、
- (2) 児童生徒の文化・体育・生活指導等の行事に関する事、
- (3) 義務教育振興のための調査研究に関する事、
- (4) その他義務教育振興に必要と認められる事、

第四条 この会は、次に掲げる者を以て構成する。(1) 滝川市内小中学校教職員、(2) 滝川市教育委員事務局職員(以下省略)

附則

- 1 この会則は昭和五十四年五月八日より施行する。
- 2 昭和四十五年度まで

の滝川市教育振興会会則ならびに江部乙町教育推進委員会規則については昭和四十六年三月三十一日をもって廃止する。

空知の教育 空知は北海道の中央部に位置し、広さは島根県と

ほぼ同じで人口五二万、一〇市一六町一村は南北に細長く温暖な地方であるが、特に冬季の幌加内町母子里では氷点下四二・一度の記録があり、気温差は大きく、岩見沢周辺は多雪地帯として知られる。

管内の公立小中学校二六六校(小一七六校、中九〇校)、道立高校三六校、道立養護学校一校、市町村立高校五校で全道の一〇パーセントを占めている。

産業基盤は、農村地帯と炭鉱地帯に二分されており、水田の減反や炭鉱閉山などで、児童・生徒の数は激減、統廃合ともからんで学校数も減少、現在ようやく小康を保っている。

いま、空知の教育関係者は、こぞって施設、設備の充実に努め、教育課題の把握と解明に意を注ぎ、かつての「教育王国」の再現をめざし、研究と実践に情熱を傾けているのである。王国とはいささか時代がかかるが、その中に先人の教育実践にかけた自負と情熱の横溢を感じることができよう。

「学校を興し教育を盛んにし児童を就学せしむることを怠らざるべし」とは、新十津川入植者の移住誓約書に見られる一条である。

空知開拓は、明治二十年前後、同郷人、開拓団体、屯田兵などの管内各地への入植によって始まったが、同時に空知における教育の営みが始動し、広大な原始林と酷薄な自然に挑む、開拓の先人は、生活の辛苦にあえぎながらも、子弟の教育を第一義のものと考えて

いたのである。

開拓の初期は、拝み小屋、個人住宅を教場とし、寺子屋私塾方式で、僧侶、神官、士族、看守などを師として教育が進められ、やがて、私設簡易教育所、教育所が開設されたが、その新築・維持・管理・教員さがしまで、開拓民共同の力によった。

また、三笠・夕張の炭鉱開墾地区では、鉱業所の福祉の一環として開設された教育所・学校が鉱員子弟を受け持ったのである。

明治四十年前後、こうした開拓農村学校・炭山学校は公立に移管されていくが、空知支庁学事主任高井幸次郎により空知教育王国が提唱された。それは、先年に発足した空知教育会が、管内的組織としての機能を發揮し始めたのに呼応したものである。

空知教育が全道に最もその名を馳せたのは、大正中頃から昭和初期にかけてであった。空知全域で教師ひとりひとりの研究や、学校ごとの実践が積極化し、管内四方面別の研究会、空知連合研究会等で、研究発表と交流が活発化したのはこの期であった。

空知を教育王国たらしめた要因としては、まず経済基盤の安定を挙げることができる。好不況による経営の変動にもめげず、炭山学校あるいは開拓農村学校に対する鉱業所や地域農民の経済的援助は多大であった。

次に、すぐれた指導者のもとに地についた研究が展開されたこと、全道から卓抜した指導力をもった校長が招かれ有能な後継者を育成し、徹底した教科研究と、実践上の鍛え合いが教師の意欲を高め自信と誇りを生み、校内に信頼関係が確立されたこと。また、研

究体制が整い、その機能が發揮されていたこと。さらに、地域住民の学校に寄せる関心が大きくなり、学校・教師を支援信頼していたことなどが考えられる。

空知の戦後教育は、戦前教育の反省から始まり、新教育への飛躍となるが、教育実践に注ぐ情熱と意欲は継承された。いわゆる組合教研は、個人研究から学校ぐるみ、市町村ぐるみの研究活動の必要性を唱え、民間教育研究団体の研究は、勤務時間を超えて教師の主体性と研究の自由を訴えた。

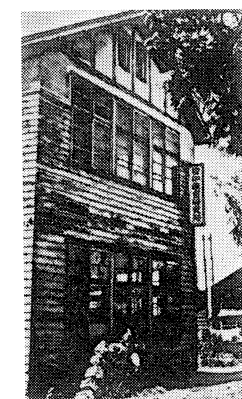
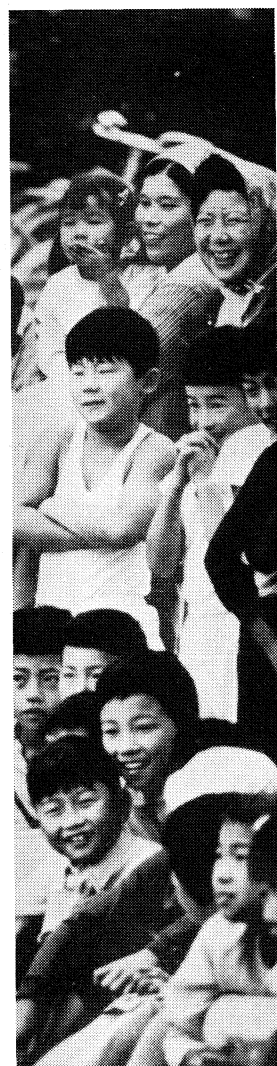
各市町村の教育振興会は、地域に立脚した活動を展開し、各教育研究所は教育理論の地域的解明に努め、貴重な研究調査資料を発刊して、研究水準の維持発展の役割を果たした。

広範な水田と炭田を基盤とした管内二七市町の各学校（昭和三十三年度小学校二六九校、中学校一四〇校、高校四四校）の研究も活発化し、多数の実践者を生み出し、戦後の教育思潮の変遷に敏感に反応しながら理論研究に打ち込み、全道的に声価を高めた業績をみることできるのである。

急激な社会の進展は、空知の学校教育の現状に多くの課題を提示している。

石炭産業の衰退は、空知に炭鉱閉山を続出させ、農村には農業経営の変化がみられ、人口流出による過疎化、農村の都市化の進行は地域社会の様相を変えた。

小中学校にあっては統廃合による学校の激減（昭和五十三年度学校数、小学校一七六校、中学校九〇校、高校四一校）、高等学校では適正配置



昭和30～36年旧滝川保健所
あとの教育研究所

などの問題はありますが、空知の各学校は、現在、こうした地域の変化に即し、適切な実践課題を掲げ、その解明に着実な努力を続けている。

教育実践を共通の土俵で、自由に交流し合う条件づくりや、基盤としての組織体制の確立など、今後の課題として指摘する向きもあるが、「みんなで創る空知教育」を目指し、創意ある実績の展開によって、空知教育の土壌がますます豊かになることが期待されるのである。

空知教育研究所 滝川市緑町三丁目一六

設立までの経過 昭和二十四年現場教職員の要望にこたえて、

空知教育振興会が発足し、空知管内を一本として諸種の研究及び事業を行ってきたが、さらに教育研究所設立の気運が盛り上り、昭和二十六年九月芦別町において行われた空知支庁管内町村会総会に、空知教育振興会長宮田秀男より、空知教育研究所の共同設立を要望したところ、総会においてこれを採択審議し、具体案を理事会において検討、さらに総会の議を経て、昭和二十七年四月二十一日空知教育研究所の発足をみたのである。

昭和二十七年四月、滝川町立江陵中学校長高橋均が研究所長を兼任し専任所員四名、事務員一名とともに、江陵中学校の一室（五坪）において研究業務を開始し、また一方、空知教育研究維持委員会を結成し、滝川町長神部俊郎が初代委員長に就任した。

沿革の概要

昭和三十年五月二十五日、もと滝川保健所の建物（二二・九五坪）を滝川町から借り受け独立庁舎とし、ここに研究事務室、図書資料室、教育相談室、研究会議室、小学校教科書研究室、中学高校教科書室、所長室を設け、研究が続けられ、教育講演会など全管内の推進力となった。

昭和三十六年十二月より、滝川市役所新庁舎内三階に移転、昭和四十三年十月九日空知教育研修センターに移転、現在に至っている。

歴代所長

- | | | | |
|----------|--|----------|-----------------------------------|
| 初代 高橋 均 | 昭和二〇・二一・二二・二三・二四・二五（兼任） | 二代 真田 幸家 | 昭和二六・二七・二八（専任） |
| 三代 関原 新 | 二九・三〇・三一・三二・三三・三四・三五・三六・三七・三八（兼任） | 四代 原 鉄五郎 | 三九・四〇・四一・四二・四三・四四（兼任） |
| 五代 小野 武男 | 四四・四五・四六・四七・四八・四九・五〇・五一・五二・五三・五四・五五・五六・五七・五八・五九・六〇（兼任） | 六代 佐藤 房夫 | 六一・六二・六三・六四・六五・六六・六七・六八・六九・七〇（兼任） |

七代 東出 芳夫 昭和~~六~~^六(兼任) 八代 坂下一也 昭和~~六~~^八(兼任)

九代 山本 定雄 〃~~三~~^三・~~四~~^八(〃) 二〇代 森谷 英夫 〃~~三~~^三・~~四~~^四(〃)

歴代維持委員長

初代 神部 俊郎 昭和~~三~~^三・~~四~~^七(滝川) 二代 阪本 茂 昭和~~三~~^三・~~七~~^七(滝川町長)

三代 佐久間貞江 〃~~六~~^六・~~四~~^六(滝川) 四代 吉岡 清栄 〃~~六~~^六・~~六~~^六(滝川町長)

業務等の概要

空知教育の実態に対する科学的調査に基づいて教育の理論と実際に関する研究を行い、管内各学校と密接な連絡の上、地域性豊かな教育の建設を図るため次の事業を行っている。

1 空知管内教育の実態調査及び資料の収集、2、教育の理論と実際に関する研究、3、教育現場に必要な資料の提供。

4、教育相談・研修・出版及び連絡の事業。

5、その他管内の教育振興に必要な事業。

組織としては、研究所を維持運営する維持委員会と連絡協議会が置かれ、研究所には、各種会議、庁舎の管理及び庶務全般、予算決算及び出納の業務、備品の整理保管に関する業務を行う庶務経理部、実態調査及び教育の理論と実践に関する業務、教育図書及び資料の収集、閲覧紹介と整理、研究紀要の発刊を行う研究調査部、研究調査成果の普及に関する業務、現場訪問研究発表会及び所報に関する業務、連絡協議会に関する業務を行う普及事業部の三部があり、所長、所員、事務員を置き、必要に応じて、研究所の業務に協力する研究員、研究協力員、調査員を委嘱することができることになった。

ており、維持運営に要する経費は空知管内市町村の拠出金及びその他の収入によっている。

なお、維持委員会では、研究所の維持運営を図り次の事項を審議決定する。

- 1 研究所規則及び委員会規則の改廃、2 収支予算及び決算、
- 3 年度事業の計画、4 研究所長の選出、
- 5 その他必要と認める事業、

委員会は、空知支庁管内の町村長九名、町村議長三名、連合PTA会長三名、市町村教育委員長六名、市町村教育長六名、学校長八名、赤平・芦別・滝川・砂川・歌志内・深川市より市長、議長のうちいずれか一名で構成、会長一名、副会長二名、常任委員若干名、監査委員二名が置かれている。

昭和二十七年から行われてきた研究、調査、課題解決の成果は毎年発刊され、教育現場、教育振興に大きな原動力となり、五十四年までに一〇二号の研究紀要をみるに至った。

また、空知教育研究所の所報として月刊された「空研」第一号は昭和二十七年七月二十三日に創刊され、その後「教育空知」と改題三十二年五月号(五七号)から「運動会の運営」「学習・行動の評価」……等と特集が始まり、昭和四十一年四月一日、「教育空知」新構想のもと、「教育を考える会」の意見交流誌として発行、昭和五十五年四月号で三四一号となり、毎月二、五〇〇部が、空知管内はもとより全道的に読まれている。

空知教育会滝川支部 明治三十一年、空知支庁では教育行政の便宜上から、管内を五分して「教育組合会」を公設し、会長・副会

長を任命してその統制に当たらせ、常設機関とし管内教育行政の中心的勢力となっていたが、三十四年「校長会」と改称した。

当時、第一組合会は夕張方面、第二は岩見沢方面、第三は樺戸方面で、第四組合会が滝川方面、第五は雨竜方面で、滝川方面の会長には工藤謙次が任命された。

その後、学校数が増加し教育文化が進展したが、その活動はあくまで内面的なものであった。しかし、しだいに進んで外部に積極的に働きかけ教育の振興を図るべきだという意見が醸成されていた。

空知教育会創立趣意書の中に「……即ち正教員不足数一六八人、未就学児童四、八四八人の多きに上れり。……」など述べられているが、この趣意書の中でもうかがい知ることは、教師は単に学校教育の振興を図るにとどまらず、地域の開発向上に意を用い、自負と気概をもって当たると共に、教員としての資質を高めることを強調している。

明治三十六年九月四日、岩見沢尋常高等小学校において、空知外三郡（樺戸・雨竜・夕張）教育会創立準備会があり、名称を「空知教育会」とすること、会長に支庁長を推戴することなどを定め、引続いて発会式が行われ、役員としてそれぞれ選任された。

会長（支庁長）村津寛、副会長（岩見沢尋常校長）越田太郎、幹事長（視学）立花誠一郎、評議員松山政隆、高柳広蔵、高田不二夫、今井勇吉（滝川村長）、山口友八、石井末之助、吉田卓。

空知教育会が管内教育振興のために行った事業の主なものとしては、次のとおりであった。

(1) 講習会の開催 教員の養成と資質向上をめざし、資格向上の講習会は多く岩見沢で、年二、三回開催、講師には北海道師範学校の教諭や管内の校長が招かれ、終わりに試験をして、準教員その他の合格者が発表された。

また、資質向上の講習会も、夏季休暇等を利用し、総体的なものあるいは科目別のものが、管内各所の適当な場所で開催されていた。(2) 会報の発行 「空知教育会報」はこの会の機関誌とし、明治三十七年に初刊、はじめは年一回であったが、明治四十三年十一月三日「空知教育」と改題し、毎月定期に刊行、研究発表などを中心に会員に愛読されていた。

(3) 空知図書館の設立 図書館敷地として石黒長平より六畝三步、坂井与一郎から五畝二七歩の寄贈を受け、明治三十九年五月十八日着工、七月二十四日完成、八月一日より開館、十一月から館内に教育品博物館を付設したが、大正元年十二月五日、図書館を「空知会館」とよぶことになった。

(4) 研究組織と運営 大正五年には空知教育会の研究組織を方面別とし各町村長・戸長・学校長に連絡されているが、その方面別は、

第一方面多度志・一巳・深川・秩父別・北竜・上北竜・音江の七か村。

第二方面江部乙・滝川・砂川・芦別・歌志内・浦臼・新十津川・雨竜の八か町村。

第三方面沼貝・岩見沢・三笠山・北村・月形・栗沢の六か町村。

第四方面幌向・由仁・角田・登川・長沼の五か村

であった。

昭和三年二月、空知支庁より「教育研究会改善に関する通達が出

され、教育題目の限定・実施活動の系統化・継続化を進め、一層建設的向上の実績を収めるためとの指示の中で、教科目を合して部会とし、部会を合して方面研究会とし、四方面研究会を合したものを空知連合教育研究会として統一を保持し、衆心一致琢磨、改善の実行力を錬成することとなり方面教育研究会所属町村別は次のとおりとなる。

第一方面幌加内・多度志・納内・音江・深川・妹背牛・一巳・秩父別・沼田・

北竜の十か町村。

第二方面江部乙・滝川・砂川・芦別・歌志内・赤平・浦臼・新十津川・雨竜の

九か町村。

第三方面美唄・岩見沢・三笠山・北村・月形・栗沢の六か町村。

第四方面幌向・由仁・角田・長沼・夕張の五か町村。

部会は複式研究所、学科研究所の二つで、学科研究所は各方面において系統かつ合理的に区分することになっており、このほか学年研究部を設けることを得るよう定むるとなっている。

各方面各町村、各部各学校はそれぞれ研究会を分担開催し、研究の実をあげ、教科部会については、文科(修身・読み方・国史・地理)、数理科(算数・理科・農業・商業・家事)、技芸科(書き方・図画・手工・唱歌・体操・手芸・裁縫)に分けて実施していた。

(5)空知高等国民学校 大正十一年十二月一日、空知教育会が設立者となって開校、同十三年三月第一回卒業式を挙げ卒業生三二名を送り出し、昭和八年三月には第一〇回卒業式を挙げ卒業生六一名(累計四〇八名)を出している。

昭和九年には、教育会結成の機熟して同年七月二十六日「空知小

第一章 学校教育

学校教員会」の結成ということもあつたが、長年、空知教育の全般にわたって偉大な貢献をした空知教育会も、進駐軍の指示で改組され、民間教育団体となり、昭和二十三年、教育会と教職員組合の二本建ては組織の弱体化を来たすものとし解散した。

滝川では、大正九年一月二十五日、空知教育会の下部組織として滝川町教育会を創定し役員を選出、町長川口敏澄が会長に、第一小学校長駒嶺末次郎が副会長に就任した。

大正十年三月四日、空知教育会支部組織に変更し、新たに支部規定を制定、役員改選を行い第一小学校長伊沢豊久が支部長となり空知教育会第二方面の中心となり、教育理論、教育実践の研究などが開かれていた。

終戦後は社会の混乱とともに教育会活動も停頓、その後、北海道教職員組合滝川支部が結成され、組合活動も盛んになるとともに教育活動面に、教育会支部と北教組支部のあることに批判があり、ついに、教育会滝川支部も、昭和二十三年四月に解散をしている。

空知教育振興会 昭和二十四年に空知教育振興会がつくられ、

二十五年にはその活動として「青少年の善導」「施設基準調査」「学校共同評価基準設定試案」などに取組み、二十六年には調査部が管内学童の国語・算数二教科の能力実態調査、また、事業部は三地区(南空知・中空知・北空知)の文教活動の諸連絡や推進を図り、文教活動の事業報告、学習指導要領普及講習会の開催、学校共同評価の研究集録発行、理科教育課程の発行、夏冬休み学習空知版の刊行などを行い、さらに、専門部は改訂単元に基づいた社会科及び理

科の作成などに当った。

しかし、この会の最大の目標は空知に教育研究所を設けることであつたので、機を見て管内市町村長を動かし、翌二十七年四月「空知教育研究所」の設立をみるに至つた。したがって、この教育振興会は発展的に解消した。

空知教育推進協議会 昭和三十二年、空知教育局、空知管内教育委員会連絡協議会、北教組空知三地区協議会、空知教育研究所の四者によって設置され、これが中心となつて、「空知教育推進計画」を作り、管内各学校はそれによって教育推進に努力した。

昭和三十九年ごろには、従来の教育局主催と組合文教活動の研究事業の対立をなくして、教育研究を一本化し研究の実をあげようと、空知全管内に「教育振興会」の設立の動きがみられるようになってきた。

昭和四十年になると、空知教育局の指導で「教育振興会連絡協議会」が各地区の代表者を集めて、各地区振興会が独自の活動をしているので「金もかかり、幅広い研究も、事業もできない。連合することによって充実する」ということで連合体組織化をもつて集まつたが、目的は果たされず、今後連絡協議会を持つてとの確認にとどまつた。

しかし、社会のめまぐるしい流動の中にあつて、教育の世界も現代化へと足を向けはじめ、いつまでも、教職員の研修が現状のままでの研究活動のみにとらわれているならば、立ち遅れていくのは明らかであり、自主研究活動をより進めるために、教職員が一堂に会

して交流の場、研修の場の必要性が痛感され、また求められ、そのような場所ができることにより、経済的な問題も解決されるわけである。

ここに、空知教育センター設置の運動が展開され、市町村からも財政的なうらづけをみて、昭和四十三年、空知教育センターが完成したことにより、無理して連合体組織にならなくとも、十分に空知教育の発展と使命が果たされるわけであり、単なる連絡機関に変わったのである。

いずれにしろ、空知教育の前進を願い活動した空知教育振興会と各市町村教育振興会の地域性に立脚した活動は、独自性のみではなく、次の時代をになう教育展望にたたねばならない。

空知支庁及び空知教育会表彰 空知支庁及び空知教育会は管内における教育公共の功績者、勤労徳行者に対し表彰式を行い功績状及び賞品を授与した。

空知郡江部乙村役場書記 藤田 五市

支庁、功績状、多年其ノ職ニ熱心精勵シ又村治ノ上ニ尺シタル效少ナカラス仍テ茲ニ之ヲ表彰ス

教育、会效、功績状、資性温厚ニシテ着実多年役場事務ニ執掌シ刻苦精勵之カ整理改良ニ努メ殊ニ就学出席ノ督勵宣シキヲ得漸次其ノ実績ヲ挙げ村治上貢献セシコト著大ニシテ同僚郷黨ノ欣仰敬慕ヲ受クルニ至レルモノ洵ニ他ノ模範トナスニ足ル仍テ茲ニ之ヲ推奨シ併テ別紙目録ノ物品ヲ贈呈ス（羽織地一反）

事績概要、慶応三年二月福井県足羽郡木田村に生る資性温厚篤実にして堅忍自制……二十六年累進歩兵一等軍曹に任せられる次で渡道し屯田司令部並に屯田各部隊を歴任し三十二年陸軍特務曹長に任し越て三十五年現役満期となるや江部乙村に卜居し専ら農業に従事す。

四十一年滝川村学務委員に就職し……四十一年滝川村より分村し江部乙村役

場設置に際し入りて臨時雇となり次で書記となり今日に至る。……殊に就学出席の督促に就きては全力を傾倒して之に当りその成績見るべきものあり、……毎学年始めの数日間には山積せる事務を有しながらも自ら学校に出張して入学状況の实地調査を行い一々所定表簿と照合を重ね……或は自ら家庭を訪問して懇諭奨励を加え或は学校職員との協力を乞ひ或は知人朋友に委嘱勧誘する等最善の力を尽し、……猶予免除等の出願……实地踏査を行い其の実状を閲し然後所定の手続を行うを常とす。……過去六か年に於ける就学……誠意努力の一般を察するに難からず。

空知郡滝川町 小川 ムメノ

支庁成績状 貞節勤儉老姑ニ事エテ至孝殊ニ多年病夫ノ看護ニ努メ又克ク困苦欠乏ニ耐エテ一家ノ生計ヲ保持シ子女ノ教養ヲ怠ラサルモ洵ニ他ノ龜鑑トナスニ足ル仍テ茲ニ之ヲ表彰ス

教育会成績状 資性温順ニシテ貞節老姑ニ事エテ克ク孝道ヲ完ウシ不幸良夫ノ重患ニ罹リ全身不随九箇年ノ長キニ渉ルモ終始一貫懇切慰撫敢テ倦怠ノ状ナク身ヲ挺シ魚行商ヲ営ミ夙夜奔走一家ノ生計ヲ支エ然モ貧苦ヲ忍ヒテ子女ノ就学義務ニ努ム里閭其行動ニ感シテ歎賞セサルナク洵ニ他ノ龜鑑トナスニ足ル仍テ茲ニ之ヲ推奨シ併セテ別紙目録ノ物品ヲ贈呈ス(帯地一筋)

事績概要 幼時両親を喪ひ明治二十六年十一歳の時姉に伴われて福島県より渡道各地を流転し三十二年八月肩書地に於て遠藤寅八内縁の妻となりしが、卅八年寅八背髓病に罹り……四十一年より全身不随となり他に老母と四人の幼児あるを以て多少の貯財も忽ち……ムメノは自奮以て日備より魚行商に転し櫛風沐雨も壓わず奔走し或は農耕に従事し……困苦の中より三子を就学せしめ居れり、暖炉据付の逸話あり其は病夫老母は彼の寒天に外にありて勞苦するに反し宅内に坐食する者に暖炉は勿体なしと云いたりしにムメノは妾は外にて活動するにより寒氣を覚えず然るに病者老人子供は寒氣に感ずる多きにより暖炉を設け以て防かざるに於ては外に出て安心して行商する能わされは曲けて据付を許し給えと哀願して据付けたりと、以て其の心事を村度す可し此行動は十年一日の如く郷閭の同情推奨する決して故なしとせざるなり。

以上は大正三年十一月六日、管内における藤田五市外四名に対し表彰式が行われた中で、関係ある二名の概要を述べたものである。

〔殖民公報〕

第一章 学校教育

最近における教育の動向 昭和二十四年六月、空知管内小学校校長会、空知三地区中学校長連絡協議会、戦後間もなく結成された教職員組合の中の校長部会が母体となつて、空知連合小中学校長会が誕生したが、この会には夕張、岩見沢の二市は加わっておらず、美唄も、昭和二十五年市制施行とともに、この会から離れている。

昭和四十一年六月、ILO第八七号条約の批准に伴い校長会は主体性を堅持し組織を強化すると共に、教職員団体との間に健全な労資関係をつくり、教育の正常な前進をはかるため、三市の加盟と空知の単一組織づくりを進め、特にILO条約発効に伴う組合離脱後の組織強化、北教組三支部とそれぞれの立場理解に努めてきた。

昭和四十二年になって広域人事が実を結び、空知と三市の交流が行われるようになって、三市も加入、大同団結して昭和四十三年名実ともに空知校長会が誕生、北、中、南、東空知の四地区となり教職員組合は、北、中、南、中央となったのである。

昭和四十三年度は、開道百年を記念する年であったが、教育界においても聖職論、専門職論、労働者論などが展開されたが、専門職という考えに立った給与待遇改善、勤務条件整備、教育課程改訂にともなう諸問題に対処、四十四年度には教育内容の充実強化、勤務条件の改善を通し教育の正常化をはかってきた。

昭和四十五年度になって、国内的にも物価高、公害問題がやかましくなり、外交的にも中国問題が出てきており、校長会事務局もこの年より滝川市から岩見沢市に移転した。

四十六年度には給特法の成立、次いで四十七年度には教育界に協

定書問題が大きくゆさぶり、国内では日本列島改造論、日中問題がクローズアップしており、教育問題も多様化、一方安定正常化のための努力が逐年続けられてきた。

昭和五十年より小中高一貫性に立った教育課程の必要、主任制問題がおり、五十一年度には主任の制度化問題、市町村学校管理規則改正に関連し、市町村教委の主体的判断に移り、議決、公布、施行、あるいは運用凍結、未議決など多様な状態となってきた。

また、改正された学校教育法施行細則及び学習指導要領は、昭和五十五年より小学校へ施行、五十三、四年度に移行措置が実施され、知、徳、体の調和のとれた人間性豊かな児童、生徒育成をめざす。

昭和五十四年度の日教組、日高教の教育研究集会は、八〇年代の教育のあり方をめぐり深刻化する教育のなかで、どうしたら教育の危機を克服できるか模索するのに懸命であったと報ぜられているが、その中の一つに「五無主義」という言葉を見る。

「無気力、無責任、無関心」の「三無主義」に、「無感動、不（無）作法」が加わった「五無主義」になった。

「新しいこと、難しいことはしない」（無気力）、「決まりを守れず、失敗は他人のせいにする」（無責任）、「他人の言動に関心を示さない」（無関心）に加えて「音楽や学芸会に参加できず、美しいものに気がつかない」（無感動）、「あいさつができず、物を受けとる時はひったくる」（無作法）。

「子育てができない親、教えることはできても、育むことを知ら

ない教師の激増が原因」と自戒をこめていつている。

破壊された生活、ロボット化した人間、自殺、シンナー遊び、盗み、果ては中学生の売春など、どの一つをとりあげても、ゆるがせにできないことばかりである。

親も子も教師も社会も、それぞれ責任を尽くし、解決を図らねばならない。そのためにも「ふれあい」「わかる授業」こそ原点である。

現代っ子

めざましい発育と体格の伸びをみせる現代っ子は、超早熟型で、三〇年前のおとなの身長を追い越すほど、だが虫歯や近視は、今までにないほどふえている。

毎年行っている小、中学校定期健康診断の結果をもとに調べる文部省学校保健調査によると、五十四年度の体格を調べると、男の子が一四歳（中三）で父親世代にあたる三十年前の一七歳男子の身長を抜き、女子も一三歳（中二）で三十年前の女子の身長を越し、体重も母親の娘時代に匹敵する発育ぶりをみせている。

子供たちの身長、体重は年毎に伸び続けており、一七歳（高三）男子の平均身長は一六九・四センチメートル、体重六〇・二キログラム、これを三十年前昭和二十四年の一七歳と比べると身長八・二センチメートル、体重七・八キログラムも上回っている。

一一歳（小六）男子の平均身長は一四二・七センチメートルで、これは三〇年前の一三歳（中二）の一四〇・七センチメートルより高く、総合的に現代っ子は父親たちの少年期に比べ二、三年早い成長ぶり

区 分	身長センチ		体重キログラム		胸囲センチ		座高センチ				
	54年度	24年度	54年度	24年度	54年度	24年度	54年度	24年度			
男 子	幼稚園 5歳	110.0	104.2	18.9	17.1	56.0	55.2	62.2	59.9		
	小学校	6	115.5	108.6	20.8	18.5	57.5	56.3	64.8	62.1	
		7	121.2	113.5	23.1	20.3	59.5	58.2	67.4	64.4	
		8	126.6	118.1	25.8	22.3	61.7	60.0	69.8	66.5	
		9	131.8	122.4	28.8	24.2	64.1	61.7	72.0	68.4	
		10	137.0	126.6	32.2	26.3	66.6	63.4	74.2	70.2	
	中学校	11	142.7	130.6	36.0	28.5	69.3	65.1	76.6	72.0	
		12	148.9	135.6	40.6	31.4	72.0	67.0	79.5	74.0	
		13	157.2	140.7	46.7	34.8	75.9	69.4	83.5	76.4	
		14	163.0	146.7	51.9	39.3	79.4	72.7	86.6	79.4	
		高校	15	166.7	154.2	56.4	45.4	82.3	76.3	89.1	83.3
			16	168.6	158.7	58.8	49.6	84.3	79.1	90.1	85.9
			17	169.4	161.2	60.2	52.4	85.8	81.3	90.6	87.4
	女 子	幼稚園 5歳	109.2	103.5	18.5	16.7	54.7	54.0	61.7	59.5	
		小学校	6	114.7	107.7	20.3	17.9	56.0	54.7	64.3	61.7
			7	120.4	112.7	22.6	19.7	58.0	56.4	66.9	64.1
			8	126.0	117.3	25.4	21.5	60.3	58.0	69.4	66.2
9			131.7	121.8	28.5	23.6	62.9	59.6	71.9	68.2	
10			138.1	126.2	32.5	25.8	66.2	61.5	74.9	70.1	
中学校		11	145.0	131.0	37.5	28.6	70.2	63.7	78.3	72.4	
		12	150.2	136.8	42.2	32.4	74.1	66.7	81.3	75.0	
		13	154.0	141.8	46.7	36.5	77.4	69.9	83.4	77.5	
		14	155.6	146.0	49.3	40.8	79.3	73.3	84.3	80.0	
		高校	15	156.2	149.8	51.3	45.0	80.8	76.3	85.0	82.3
			16	156.6	151.5	52.2	47.6	81.6	78.5	85.0	83.3
			17	156.7	152.3	52.3	49.2	81.9	79.7	85.0	83.8

＜健康診断全国平均＞

四・〇センチメートルと早々と母親世代の一七歳の背丈を追い越している。体重でも現代っ子一歳の体重が母親世代の一三歳に匹敵、一四歳では一七歳の体重を越える発育ぶりをみせている。

一方、六歳から一七歳までの成長期の一年間に身長がどれだけ伸びたかを発育量として見ると、男女とも二十二年度生まれが最も伸びが大きく、(一一年間で五六・八センチメートル伸びた)、三十六年度生まれまではやや減る傾向が続いている。体重では男子がやや増、女子は二十八年度生まれ以降微減の傾向になっている。全般に現代っ子発育量が男子体重を除いて低下ないし横ばいになっていることから、現代っ子の体格の良さは五歳までの発育量が大きくなっているためとみられ、早熟型であることを示している。

を示している。

この傾向は女子でも同じ、一七歳(高三)の身長は三〇年前の同年齢より四・四センチメートル大きく、体重でも三・一キログラム上回っている。現代っ子女子が三〇年前の一七歳身長に達するのは一二歳(中一)から一三歳(中二)の間で、一三歳の身長は一五

なお、本道の一七歳平均身長は一六九・〇センチメートルで全国平均(一六九・四センチメートル)並み、女子も一五六・七センチメートルで全国平均(一五六・七センチメートル)とほぼ同じであった。

「裸眼視力一・〇未満」の視力異常は、この五年間増加傾向が続き、中学生で三五・二、高校生で五三パーセントと大幅に増え、ま

中3男子の体力比較

種 目 (単位)	本道	全国
垂直とび (cm)	53.3	54.58
背筋力 (kg)	117.5	114.05
握力 (kg)	35.5	37.37
上体そらし (cm)	52.2	54.82
50 m 走 (秒)	7.8	7.69
走り幅とび (m)	392.8	414.21
ハンドボール (m)	25.6	24.33
懸垂 (回)	5.3	6.79
1500 m 走 (秒)	379.0	360.8
身長 (cm)	163.8	163.0
体重 (kg)	53.6	51.9

た虫歯はほとんど全員がも
っており、中学九四・五パ
ーセント、高校九五・九パ
ーセントで、これまでの最
高の数字が出た。

△北海道新聞五五・二・二三▽

・本道の児童・生徒

道教委が昭和五十四年度
独自に実施した体力診断結

果中三男子（一四歳）を全国平均（五三文部省調査）と比べると体力診
断テストでは七種目のうち背筋力だけ三・四キログラム勝っていた
が、あとは軒並みレベル以下、上体そらしは二・六センチメートル
劣り、体が硬いことを物語る。運動能力テストでもハンドボール投
げだけが一・二七メートル遠くで、五〇メートル走で〇・一一秒遅
く、一、五〇〇メートル持久走では一八・二秒も遅れ、懸垂も一・
四九回少なく、走幅とびも二一センチメートルたりない。この傾向
は全体で見ても体力は男子背筋力以外は、基礎体力要素平均以下、
女子は握力、背筋力がレベル以上だが、敏捷性・柔軟性は低く、さ
らに運動能力は男女とも投力を除き、年齢、各種目とも全国平均を
下回った。

△北海道新聞五五・三・一三参照▽

市立学校施設整備審議会委員 学校施設を整備するため市教育委

員会では、本審議会委員を昭和五十一年五月十二日に委嘱した。

全市的な立場にたった学校整備を行う目的をもって、委員には市

内の各小・中学校PTA会長及び役員並びに学校長を委嘱、審議に
あたっては将来展望にたった教育施設整備を目標に慎重に行われ、
この年度内に計画案を答申し、市教育委員会では積極的な建設を市
に要望した。市ではこれに基づき施設整備を行っている。

会長には江川虎松が選任された。委員任期は二カ年である。

委員氏名

江川 虎松	山口 光義	野瀬 武二	坂下 薫
佐藤 幸男	市川 淳一	国嶋 賢二	坪田 巧
計良 邦雄	藪内 秀之	高平 克己	大川 平吉
斉藤 富男	江良 俊雄	稲童丸 豊	服部 賢三
高橋 健	森谷 英夫	谷岡 齊	渡辺 鉄三郎
山本 定雄	渡辺 昇	小田 茂	佐々木市之助
近藤 輝雄	毎原 政夫	藤田 恵子	田端 美智子
白水 美智子	照井 清彦		

第六節 学校給食・学校林

学校給食 給食用物資の宅配、拡充、放出について、昭和二

十二年の「北海道新聞」を調べてみると、「学校給食はすでに一月
中旬から全国各都市で実施しているが、燃料、調味料などが思うよ
うに手に入らず継続が危ぶまれていたが、この程、文部省では農
林、厚生、大蔵、商工、運輸など関係当局と打合せた結果、左の学
校給食用物資を宅配することになった。△薪（都市のみ）切符制によ
り毎月（但し八月を除く）一〇束ないし二〇束、またはこれに代わる石
炭を配給 △食塩（給食実施の全学童に）食塩を一人一食につき二グラム